

在京公家・僧侶などの日記における関ヶ原の戦い関係等の記載について (その 2)

－時系列データベース化の試み (慶長 5 年 3 月～同年 12 月)－

白 峰 旬

【要旨】

関ヶ原の戦いに関する諸史料を検討する場合、関ヶ原の戦いに関係した部将が発給した書状などの一次史料 (同時代史料) の内容検討が重要であるが、それと同時に、当時、在京していた公家・僧侶などの日記における関ヶ原の戦い関係の記載について検討することも重要である。よって、本稿ではこうした視点から慶長 5 年 3 月から同年 12 月までの公家・僧侶などの日記における関ヶ原の戦い関係等の記載を筆者 (白峰) が現代語訳して時系列データベースとしてまとめ、それを見ていくうえでポイントとなる箇所について、若干の説明を小論として加えた。

【キーワード】

関ヶ原の戦い、在京公家・僧侶、日記、豊臣公儀、上杉討伐

※拙稿「在京公家・僧侶などの日記における関ヶ原の戦い関係等の記載について (その 1) - 時系列データベース化の試み (慶長 5 年 3 月～同年 12 月) -」(『別府大学紀要』57号、別府大学、2016年) より続く。

在京公家・僧侶などの日記における関ヶ原の戦い関係等の記載についての時系列データベース

【慶長5年】

3月16日	増田長盛・前田玄以・長束正家が大阪より今日上洛と聞く。	北野社5-236頁
3月17日	三奉行衆が上洛した、ということである。	義演准2-146頁
3月18日	金蓮院演照が金堂の礼として三奉行衆へ遣わす。	義演准2-148頁
3月24日	毛利輝元より毎月の祈念料9貫文が来る（北野天満宮）。	北野社5-237頁
3月27日	北野天満宮の祠官・松梅院が大阪の大谷吉継へ見舞いに行く。	北野社5-238頁
3月28日	北野天満宮の祠官・松梅院が家康のところへ礼に出て、家康の御前で碁を見物する。秀頼様へも御礼を申し上げ、前田玄以・片桐貞隆が取次であった。秀頼様は御手にて鬨斗2本を下された。増田長盛へ見舞いをおこない、長束正家へ御礼を申し上げる。 ※豊臣秀頼、家康、増田長盛、長束正家、前田玄以、片桐貞隆は3月28日の時点で皆、大坂城にいたということになる。	北野社5-238頁
4月4日	※前田玄以について「所司代」の記載あり。	北野社5-241頁
	※「公儀」の記載あり。	北野社5-242頁
4月12日	※「所司代」の記載あり。	北野社5-243頁
	前田玄以・増田長盛は（京都）所司代なので（以下、省略）。	北野社5-243頁
4月17日	家康が大阪より伏見城へ入った、ということである。	義演准2-159頁
4月18日	家康が（伏見より）上洛する。	北野社5-244頁
4月19日	今日、家康が参内する、ということである。	義演准2-161頁
4月21日	北野天満宮の祠官・松梅院が家康へ見舞いをおこない、増田長盛へも見舞いをおこなう。	北野社5-245頁
4月22日	前田玄以が会所の作事の見舞いに出る。	北野社5-245頁
	家康が大阪へ下る、ということである。	義演准2-161頁
4月25日	毛利輝元より毎月の祈念料9貫文が来る（北野天満宮）。	北野社5-247頁
4月28日	宇喜多秀家が「御上様」（秀吉のことか？或いは秀頼のことか？）の夢想を御覧になった書付を北野天満宮の祠官・松梅院に与えた。	北野社5-247頁
5月13日	木下利房が北野天満宮へ参詣。北野天満宮の祠官・松梅院が笏を家康様、秀頼様へ進上する。	北野社5-252頁
5月16日	北野天満宮の祠官・松梅院が笏を前田玄以に遣わす。	北野社5-253頁
5月20日	秀頼様より御帷子・生絹を下される（北野天満宮）。	北野社5-253頁
	昨日、毛利輝元・御上様（秀頼）より帷子2つが与えられる（北野天満宮）。	北野社5-254頁
	（以下のことを）伝え聞いた。東国（家康と上杉景勝の抗争のことか？）・北国（家康と前田利長の抗争のことか？）はすべて和談になった、ということである。珍重である。	義演准2-173頁
5月25日	毛利輝元より毎月の祈念料9貫文が来る（北野天満宮）。	北野社5-254頁
5月29日	細川幽斎が出陣（上杉討伐か？）用意のため帰国する。	舜旧記1-228頁
6月6日	梵舜（豊国神社の神宮寺別当）が家康の見舞いのため大阪に下る。その際、吉田兼見よりの勝軍杖を進上する。	舜旧記1-229頁

6月8日	北野天満宮の祠官・松梅院が毛利輝元のところへ、輝元の下国のため、暇乞に行く。	北野社5-258頁
	義演が進物として曝布を秀頼卿へ50、御袋(淀殿)へ20、徳川家康へ50、毛利輝元へ30(ただし、帰国により遣わさず)、宇喜多秀家へ30(ただし、帰国により遣わさず)、前田玄以へ30、増田長盛へ30、長束正家へ30を遣わした。 ※秀頼が(家康よりも先に)最初に出てくる点に注意すること。このメンバーは当時の豊臣政権の中核メンバーと考えられる。つまり、豊臣秀頼・淀殿・三大老・三奉行である。石田三成は失脚中のためここに名前はない。義演が進物(曝布)を各自に送ったが、その量について格差をつけているので、その点にも注意すること。秀頼50・淀殿20・家康50・輝元30・秀家30・前田玄以30・増田長盛30・長束正家30である。秀頼と家康は同数である点に注意すること。このことは当時、家康は五大老の中でも別格であったことを示すものか?家康を除く二大老と三奉行が同数である点に注意すること。このことは五大老と五奉行は基本的に同格であったことを示すものか? ※6月8日の時点で毛利輝元と宇喜多秀家が大坂城に在城しておらず、帰国中であった点に注意すること。	義演准2-178頁
	毛利輝元が国へ下る、とのことで白金(銀)20枚、尾道の櫓10を御所へ進上する。	お湯殿9-158頁
6月10日	家康が御陣(上杉討伐)へ下るあとにて(以下、省略)。	北野社5-258頁
6月11日	毛利輝元・宇喜多秀家は在国である。 ※6月11日の時点で毛利輝元と宇喜多秀家が上方におらず、在国していた点に注意すること。	義演准2-179頁
6月12日	来る(6月)16日、家康が(上杉討伐のために)出陣する。よって、勸修寺寒縄手の道作りのことを(家康が)命じた。醍醐・小野も同様である。ただし、このことは昨日(家康が)命じられた。この(家康の)出陣は、(上杉)景勝退治(のため)、ということである。(上杉景勝の居城は)奥州会津である。遠路(であるため)軍勢は難勘至極、ということである。	義演准2-179頁
6月14日	家康は来る(6月)16日に(上杉討伐のために)出陣する。寺領での道作りのことは堅く(家康が)命じた。勸修寺より道が出来たという旨の注進があったことを(家康側に)申し入れた。	義演准2-180頁
6月16日	家康が大坂(城)より(出陣して)今日、伏見城に着いた、ということである。伊達侍(伊達政宗とその家臣)の出陣があり、(その数は)3000人ばかり、ということである。(それらは)当郷(醍醐)を通過して行った。 ※伊達政宗の兵力数が3000人ばかりである点に注意したい。	義演准2-180頁
	上杉景勝に逆心があるので、家康が(上杉討伐のために)発向する、ということである。(家康は)大坂より伏見まで上ってきた。	言経卿10-172頁
6月17日	今日、家康は伏見に逗留。	北野社5-259頁
	今日、家康は伏見に逗留した。よって、山科言経などが家康を訪ねた。	言経卿10-172頁
	家康は昨日、伏見まで来たので、西洞院時慶が堂上衆と申し合わせて(家康を)見舞った。	時慶記2-74頁

6月18日	北政所が豊国社へ参詣。増田長盛、前田玄以が豊国社へ参詣。	舜旧記1 - 230頁
	今日、前田玄以が豊国社へ参詣。	北野社5 - 260頁
	家康が出陣して下国したが、当所（醍醐）を巳の刻（午前10時頃）に通っていった。	義演准2 - 180頁
6月19日	今日の夕方、前田玄以が伏見へ帰る。 ※前田玄以は普段は伏見にいた、ということか？	北野社5 - 260頁
6月27日	今夜、北野天満宮の祠官・松梅院が大谷吉継に道明寺糶10袋を進上する。	北野社5 - 261頁
7月5日	宇喜多秀家が豊国社へ参詣。 ※7月5日の時点で宇喜多秀家は上方にいたことになる。 ※この7月5日の宇喜多秀家の豊国社参詣を「前代未聞の物々しい出陣式」とする見解がある（白川亨「北政所は三成の決起を支持していた！」、『歴史群像シリーズ 石田三成』、学習研究社、1998年、157頁）。また、同様に「このわずか三日後（引用者注：7月5日を指す）」に「大老中で最も豊臣寄りの宇喜多秀家が豊国神社において出陣の儀式を執り行っており（後略）」とする見解がある（河合秀郎「西軍決起の謎」、『歴史群像シリーズ【戦国】セレクション 決戦関ヶ原』、学習研究社、2000年、170頁）。	舜旧記1 - 232頁
7月6日	※前田玄以について「所司代」の記載あり。	北野社5 - 269頁
7月6日	当年は青木重矩・宇喜多秀家が御上様（秀頼）より（の使者として）来た。よって、御祈念をおこなった（北野天満宮）。 ※7月6日の時点で宇喜多秀家は上方にいたことになる。	北野社5 - 272頁
7月8日	毛利秀元が御上様（秀頼）へ初めて巻数を進上する。	北野社5 - 274頁
7月11日	この度の忿劇（いざござなどによる世の騒ぎ）により、このようになったのか。前田玄以の息子の修善（前田茂勝〔主膳正〕カ）が今日、（上杉討伐のため）大坂を出陣して伏見へ着いた、ということである。義演が尾池清左衛門（前田茂勝の家臣）へ帷一重を出陣見舞いとして遣わした。	義演准2 - 199頁
7月13日	大坂に雑説がある、とのことを申し来る。	北野社5 - 275頁
	大坂に雑説がある、ということである。よって、伏見より荷物を京へ運ぶ（者がいる）、ということである。（これは）家康が（上杉討伐のために下国して伏見城が）留守になっているからである。何事があるのか。（その）子細は（義演は）知らない。 ※別々の2つの史料が同じ日（7月13日）に大坂での雑説を報じている、というのは、具体的に大坂で何かおこったのかも知れない。	義演准2 - 200頁
	昨夜より伏見・大坂において風評・騒動（がある）と（いうので）これを尋ねるつもりである。（上杉討伐のために出陣した）陣立の衆（の中で）少々帰ってきた衆がいるとのことであり、（このことは）不審である。このあたりの惣門3ヶ所を2、3日以前より閉めている。（そして）潜り戸だけ（開けている）。 ※7月13日の時点で、上杉討伐に向った（つまり東下した）諸将の中で、少数の部将は帰ってきていた、としている点は注目される。このことについて西洞院時慶が不審である、と率直に感想を書いているのは興味深い。西洞院時慶は戦争の予感というかきな臭い雰囲気を感じ取っていたのかも知れない。	時慶記2 - 83頁

7月14日	伏見・大津でことのほか騒ぐ。	北野社5-276頁
	天下に雑説がある。(この雑説は)この(ところ)4、5日中(の)ことである。	言経卿10-189頁
	世上は物騒であると言っている。	時慶記2-84頁
7月15日	天下への謀逆が露顕した。(これは)伏見城の家康の軍兵が籠城した(ことを指す)。 ※7月15日に伏見城の籠城が開始されたことがわかる。ちなみに、7月15日は大坂三奉行によって「内府ちかひの条々」が出される2日前である。「内府ちかひの条々」が出される2日前に伏見城籠城が開始された点に注意したい。	舜旧記1-233頁
	去る(7月)11日より、伏見・大坂に騒動あり。	孝亮宿-730頁
	最前(上杉討伐のために)出陣した衆が近江あたりより帰陣した。よって、雑説があり、諸人は物を所々へ運び渡している。(こうした世上は)猥雑(ごたごたと入り乱れていること)であり、言語道断(とんでもないこと)の状態である。 ※「内府ちかひの条々」が出される7月17日の2日前に、近江から(上杉討伐に)出陣した衆が帰陣した、という点は注目される。その意味・背景をよく考える必要がある。	義演准2-201頁
	世上の雑説に種々(の)ことを)忘却した。	言経卿10-190頁
7月16日	(世上では)雑説があり、(こうしたことは)以ての外(とんでもないこと)である。	義演准2-201頁
	世上の雑説は普通ではない。	言経卿10-190頁
7月17日	今日、伏見でことのほか騒ぐ。 ※家康家臣が伏見城籠城を開始したことを指すか?	北野社5-276頁
	今夜、大坂において小笠原少齋が細川忠興の女中(細川ガラシヤ)を人質に出すようにと奉行衆より命じられた。しかし、細川忠興が留守中に人質を出すことは曲事と申し置いたので(人質を)出さなかった。よって、細川忠興の女中を介錯して、小笠原少齋も腹を切り、屋形へ火を掛け、稲留(稲富カ)・川北などと言う者、両3人も腹を切った、とのことである。 ※この「奉行衆」は三奉行を指すと考えられる。	北野社5-276頁
	大坂城へ御奉行衆がすべて籠った、とのことを申し来る。毛利輝元も上洛する、ということ申し来る。 ※大老の毛利輝元については別記しているので、この場合の「御奉行衆」は三奉行を指すことになる。 ※御奉行衆(三奉行)が大坂城に籠った、と記しているのは、家康方との臨戦体制をとった、ということの意味すると考えられる。	北野社5-277頁
	(世上は)物騒なので、寺家構の堀(普請)以下を明日命じる予定である。よって、寺領の人夫について堅く仰せ触れた。(その)奉行は宰相(山田長運)である。	義演准2-202頁
	伏見・大坂において、ことのほか騒ぎがあるので(後陽成天皇から)秀頼へのお見舞いとして広橋兼勝(権大納言)を遣わされた。	お湯殿9-164頁
	去る(7月)11日に伏見・大坂で騒動があったという風聞がある。毛利輝元が数万騎を召し連れて大坂に向った、ということ聞いた。	押小路-92頁

7月18日	<p>今夜、家康の衆が伏見の城に籠り、伏見にある奉行衆の家共に残らず城中より火を掛けた。今日、地震があった。</p> <p>※「伏見にある奉行衆の家共に残らず城中より火を掛けた」というのは、伏見城中にある奉行衆の屋敷（大蔵丸〔長束正家〕・徳善丸〔前田玄以〕・治部少丸〔石田三成〕・四丸〔増田長盛〕）に火を掛けたということなのか、或いは、伏見城下にある奉行衆の屋敷に火を掛けたということなのか、この記載からは明確にはわからない。伏見城下にある奉行衆の屋敷に火を掛けたということならば、「家康の衆」が伏見城から出撃して放火したことになる。</p>	北野社5-277頁
	<p>（以下のことを）伝え聞いた。昨日（7月17日）の夕方、大坂城西の丸へ毛利秀元が（秀頼様の）御守護のために入った、ということである。この中（丸カ）は家康の住宅の丸である。</p> <p>※原文の「毛利宰相」について、義演准-2、202頁の頭注では「毛利輝元」に比定しているが、「毛利輝元」は「毛利中納言」としてあとで出てくるので、この時点で「毛利宰相」というのは毛利秀元を指すと考えられる。</p>	義演准2-202頁
	<p>前田玄以（前田玄以の名前の部分は塗抹されている）・増田長盛・長束正家の3人が家康へ（ここには塗抹された部分がある）條数（＝「内府ちかひの条々」）にして江戸へ遣わした、ということである。伏見城は、今もなお、家康の衆が籠っている。寺家の南の構えは今日仰せ付けた。</p> <p>※「内府ちかひの条々」を（家康がいる）江戸へ遣わした、という記載は注目される。この点を考慮すると、家康が「内府ちかひの条々」が出たことを知った日付は通説よりも早くなると考えられる。</p> <p>※「内府ちかひの条々」が三奉行によって出されて、家康がいる江戸へ遣わされたことを、7月18日（「内府ちかひの条々」が出された翌日）の時点で武士階級ではない義演が知っていたことは注目される。</p> <p>※前田玄以の名前が塗抹された理由はよくわからないが、前田玄以が反家康の立場で動いたことについて、義演にとって関ヶ原の戦い後に不都合な理由ができたからかもしれない。しかし、実際に「内府ちかひの条々」は三奉行（前田玄以・増田長盛・長束正家）によって出されている。</p> <p>※「家康へ」の次の塗抹された部分に何が書かれていたのかよくわからないが、内容的には家康が秀頼様の敵になった、という意味のことが記されていた可能性が考えられる。このことが義演にとって関ヶ原の戦い後に不都合になり、塗抹した可能性もある。</p>	義演准2-202頁
	毛利（輝元）の内義より湯立（豊国社）。	舜旧記1-234頁
	<p>世上の騒動は普通ではない。大坂にて細川忠興の女房衆（細川ガラシヤ）が自害した。同じく息子12才、同じく妹6才等は母が切り殺させて殺した、ということである。（そして）私宅に火を掛けた。小笠原（秀清）・荒川等が介錯し、（それから）腹を切った、ということである。細川忠興は（上杉討伐のため）関東にいる、ということである。（このことは）昨夜のことであった、ということである。</p> <p>※細川ガラシヤの自害の報は、翌日には京都に届いたことになる。</p>	言経卿10-191頁
	西洞院時慶が豊国社に参詣した。内々に石田三成が軍勢を率いて豊国社へ（参詣のために）来た、とのことであり、（このことは）物騒である。ただし、そのあたりは静かである。広橋兼勝（権大納言）	時慶記2-85～86頁

	<p>は昨日、大坂へ（後陽成天皇からの）勅使として遣わされ、今日の夕方上洛した。細川忠興の女衆（細川ガラシヤ）が昨夜自殺した。小笠原（秀清）が介錯した、とのことである。伏見城へ今日・明日中に攻撃すべき命令がある。すべて一致（一敵カ）は家康公一人（である）との風説がある。</p> <p>※「一致」が「一敵」の誤記であるとすれば、家康一人だけを敵とする、としている点は重要である。つまり、家康だけを公儀から排除（放逐）したことがわかる。</p> <p>※時慶記 2 には「内府ちかひの条々」に関する記載はないが、その理由はよくわからない。</p>	
	<p>大坂より広橋兼勝（権大納言）が上京した（京都に帰ってきた）。何事もなく（状況としては無事であり）、まず大坂の様子は毛利（輝元）次第であるので、安心して思し召されるように、と前田玄以が返事をした（とのことであった）。</p>	お湯殿 9 - 164 頁
7 月 19 日	<p>伏見が焼ける。</p>	北野社 5 - 277 頁
	<p>家康の家人（家臣）共が伏見（城）に籠城する。そして、今朝、伏見（城）丸の内の前田玄以、増田長盛の家を焼き払った。伏見で火事があり、辰の刻（午前 8 時頃）から申の刻（午後 4 時頃）に至り焼けて終わった。また、晩に伏見城で火事があった。</p>	孝亮宿 - 730 頁
	<p>毛利輝元が 6 万（の軍勢）にて大坂城へ籠った、ということである。※毛利輝元の軍勢数（6 万）がわかる点、大坂城へ籠ったとしている点に注意すること。</p>	義演准 2 - 202 頁
	<p>家康へ奉行（衆）より（出した）十三ヶ條（＝「内府ちかひの条々」）が流布し、（義演もそれを）一見した。</p> <p>※大名ではない義演が 7 月 19 日（「内府ちかひの条々」が出された翌々日）の時点で「内府ちかひの条々」を見ている点に注意すること。「内府ちかひの条々」の流布の速さなどの状況を考えるうえで参考になる。</p>	義演准 2 - 202 頁
	<p>辰の刻（午前 8 時頃）、伏見城の籠（城）衆が前田玄以・長束正家以下の宿所を焼いた。このことには仰天した。寺家の南構は自身が命じて切りふさいだ。終日、（伏見城攻撃のため）鉄炮を撃っている。御城（伏見城）近所の屋形は終夜（一晚中）放火されている。</p>	義演准 2 - 202 頁
	<p>伏見城に家康の内衆（家臣）の鳥居元忠以下、4、5 人の侍がいて、そのほか人数（軍勢）が多くいる、ということである。大坂（豊臣公儀）より猛勢にてこれ（伏見城）を攻めた。（そのため家康の家臣は伏見）城から出て近所の増田長盛・前田玄以以下の家共を放火した。（伏見城攻撃のため）昼夜、鉄炮を撃っている。</p> <p>※大坂より猛勢にてこれ（伏見城）を攻めた、という記載は注目される。この場合の「大坂」とは豊臣公儀を指すと考えられる。</p> <p>※昼だけでなく夜も鉄炮を撃っている点は注目される。夜間、伏見城中にいる敵（家康家臣）を眠らせない効果を狙ったものか？</p>	言経卿 10 - 191 頁
	<p>伏見城二の丸内より焼き払う。騒動がある。丹後国へも攻める人数（軍勢）が行く、と言っている。丹後のことは心許ない、と言っている。終夜、伏見（城）が焼ける。（伏見城を攻撃する）鉄炮（の音）を聞く。</p>	時慶記 2 - 86 頁
7 月 20 日	<p>八ツ時（午後 2 時頃）に地震があり揺れる。</p>	北野社 5 - 279 頁
	<p>伏見に夜前・今日、鉄炮（の音）が鳴る。</p>	北野社 5 - 279 頁

	昨日、丹後へ城共（細川幽斎の居城である田辺城など）を攻めに人数（軍勢）が行った、とのことである。	北野社5-279頁
	今日、伏見（城）松の丸あたりで火事があった。	孝亮宿-730頁
	伏見城へ秀頼様の衆が押し寄せて戦いがあった。伏見城には家康の衆が留守居をしている。（伏見城攻撃の）鉄炮（の音）が天に響いた。※伏見城を攻撃するのが「秀頼様衆」であり、伏見城にいるのが「内府衆」としている点に注意すること。つまり、この戦いは「秀頼様衆」（豊臣公儀の軍勢）と「内府衆」（家康家臣）の戦い、ということ意味する。石田三成や毛利輝元の衆とはしていない点に注意すること。	義演准2-203頁
	伏見城を昼夜攻めている、ということである。（伏見城攻撃のため）鉄炮を撃つ。 ※昼だけでなく夜も伏見城攻めをしている点は注目される。夜間、伏見城中にいる敵（家康家臣）を眠らせない効果を狙ったものか？	言経卿10-192頁
	伏見（城）は今日も焼けた、とのことである。伏見（城）は今も燃えていて（伏見城攻撃の）鉄炮の音は絶え間がない。 ※「伏見（城）は今日も焼けた」としているのは、7月20日より前の伏見城攻撃中から焼けていた、ということか？	時慶記2-87頁
7月21日	明日、北野惣中は一人も残らず出て垣以下をするように申し付ける。乱世であるので、用心のためである。 ※「乱世」という認識に注意すること。	北野社5-279頁
	北野在所中は、明日、いずれも惣構え普請を申し付けるので、出るようにと申し付ける。	北野社5-280頁
	一昨日、丹後へ御人数（軍勢）を遣わした、とのことである。	北野社5-280頁
	伏見は一段と乱世なので、人斬りがある、とのことである。 ※「乱世」という認識に注意すること。	北野社5-280頁
	伏見は一段と城攻めがある、とのことである。	北野社5-280頁
	今日、伏見には（城攻めのために）大勢が付いている、とのことである。	北野社5-280頁
	伏見城攻めは（以前と）同じである。（伏見城への）寄せ衆はまだ大将分（大将に相当する立場の者）が着いていないのか。京都のこのあたりの郷民は小栗栖山にて（伏見城攻めを）見物した、ということである。（伏見城攻めは）北東方の堀の際まで攻め寄せた、ということである。戌の刻（午後8時頃）に大攻めがあり、鉄炮の音が天地を動かした。義演は長尾山にて（伏見城攻めを）見物した。※庶民が伏見城攻めを山から見物したというのは、庶民にとって伏見城攻めは見物の対象であった、ということがわかり興味深い。また、義演にとっても伏見城攻めは見物の対象であった、ということがわかる。※伏見城への大攻めを夜の8時頃におこなうというのは、城攻めは昼間とは限らないことがわかり興味深い。	義演准2-203頁
	伏見城へ昼夜鉄炮を撃つ。 ※伏見城へ昼夜鉄炮を撃つ、ということは一日中铁炮を撃ったことになる。伏見城中にいる敵（家康家臣）を夜寝かせないためか？	言経卿10-193頁
	伏見城に対する鉄炮の音は激しい。	時慶記2-87頁
7月22日	伏見での鉄炮の音が洛中（京都の市中）で聞こえる。（伏見から洛中までの）距離は3里（約11.8km）である。 ※伏見城攻めの鉄炮の音が京都市中で聞こえたということは、かなりの大音響であったことがわかる。	孝亮宿-730頁

	<p>城攻め (伏見城攻め) の (材) 料として竹木を伐り取る、ということなので、この度、守護不入の折紙を写して、在所の北南の構えにこれを打った。同じく随門の小野村にもこれを打った。</p>	義演准 2 - 203 頁
	<p>伏見城へ夜毎 (毎晩) 夜毎 (毎晩) だけ鉄炮を撃つ。宇喜多秀家の人数 (軍勢) が伏見 (城攻めの包囲攻撃中の陣) へ詰めることが完了し、晩より鉄炮を撃った。世上の雑説により大津から 8000 が (京都に?) 上り、興門 (意味不詳) に滞留した。 ※伏見城攻めで毎晩、夜だけ鉄炮を撃った、という記載は注目される。伏見城中の敵 (家康家臣) を眠らせない心理戦の意味があるのか? ※宇喜多秀家の軍勢が晩から鉄炮を撃った、としている点に注意すること。夜間の鉄炮による攻撃もあった、ということになる。 ※宇喜多秀家の軍勢が 7 月 22 日に伏見城 (攻めの包囲攻撃中の陣) へ詰めることが完了した点に注意すること。</p>	言経卿 10 - 193 頁
	<p>西洞院時慶が巳の刻 (午前 10 時頃) に大坂へ下向した。この度、諸大名衆の一統 (家康を公儀から排除して、秀頼のもとに反家康で諸大名が全体にまとまった、という意味) のあと、(秀頼への) 御見舞いのためである。秀頼へは前田玄以をもって申し入れる予定である。紫竹 (京都の地名。現京都市北区紫竹上竹殿町) の人足が相違があり、(来なかったので) 急に近衛信尹へ願い出て馬を受け取り陸路 (で大坂へ) 行った。(その途中) 堤の道は軍勢が多いため道 (を行くのが) 遅く、守口に泊った。その軍勢は小早川秀秋・大谷吉継・宇喜多秀家等の人数 (軍勢) であった。また、毛利家の人数 (軍勢) も行った。(これらの軍勢は大坂から) 伏見・近江路へ思い思いに行く、と (のことである)。 ※7 月 22 日の時点で、公家の西洞院時慶がわざわざ大坂へ下向し、その目的が、この度、諸大名衆の一統のあと、(秀頼への) 御見舞いのためとしているのは、この時点で公儀から家康を排除した後、豊臣秀頼を直接推戴した石田・毛利連合政権 (豊臣公儀) が成立したことを公家 (朝廷) として認めていたということになる。 ※「秀頼へは前田玄以をもって申し入れる予定である」としているのは、前田玄以が秀頼への取次の役目を果たしていたことを意味する。 ※豊臣公儀方の主力戦力は小早川秀秋・大谷吉継・宇喜多秀家・毛利輝元であったことがわかる。7 月 22 日の時点では、小早川秀秋は完全に豊臣公儀方であったことがわかる。これらの軍勢が伏見・近江路へ行った、ということは、伏見城攻撃や家康方軍勢の西上に対する近江での迎撃に向った、ということであろう。</p>	時慶記 2 - 87 頁
7 月 23 日	<p>宇喜多秀家が豊国社へ参詣。北政所より祈祷 (豊国社)。</p>	舜旧記 1 - 234 頁
	<p>今日より、北政所が小早川秀秋の祈念のために七日参りをさせて、銀子一枚を下さる (北野天満宮)。</p>	北野社 5 - 280 頁
	<p>※「乱世の時なので」という記載がある。</p>	北野社 5 - 280 頁
	<p>今夜、伏見で大鉄炮 (「大てつほう」) がことのほか鳴る。 ※鉄炮の音と大鉄炮の音の違いを聞き分けることができたということか?</p>	北野社 5 - 281 頁
	<p>昨日の夕方、小早川秀秋が伏見城攻めの衆として着いた。(伏見城の) 城内より火を出した。(これは伏見城) 攻めの衆を射取る (弓矢で射殺すること) べきため、ということである。</p>	義演准 2 - 203 ~ 204 頁

	<p>伏見城に対して暮れ（夕暮れ）より夜中（まで）鉄炮を撃った。 ※この場合も鉄炮による夜間攻撃ということになる。</p>	言経卿10-194頁
	<p>西洞院時慶は辰の刻（午前8時頃）に大坂へ着き、前田玄以の屋敷へ行った。（それから）金六に頼んで（大坂城の門を通行するための）門の切手の札を借用して（大坂城の）玉造口から入った。前田玄以は病気のため待たされた。その後、前田玄以に直面して病証（病気の状態）について話された。増田長盛に見舞いを申し置いた。毛利輝元との対面は心静かであった。（その時）酒により沈酔（酒に酔いつぶれること）した。脇坂安治のところで食事をして心静かに語った。脇坂安治の（上杉討伐からの）帰陣について珍重である旨を述べた。（その後）守口へ帰って泊った。毛利秀元・安国寺恵瓊・石田正澄等の衆の軍勢は多かった。 ※大坂城玉造口門に入るためには、切手の札が必要だったことがわかる。 ※7月17日に「内府ちかひの条々」を出したあとの大坂城内の様子がよくわかる。 ※この日、西洞院時慶が大坂城内で会った者は上記以外にも多いので、これらの人々を調べると、当時の大坂城内における政権の内実がわかると思われる。 ※この時点（7月23日）で、大坂城内に大老の毛利輝元、奉行の前田玄以、増田長盛がいたことがわかる。 ※この時点（7月23日）で、大坂城内にいた前田玄以は病気であったことがわかる。 ※西洞院時慶は毛利輝元には対面しているが、秀頼とは対面していない（秀頼との対面の記載はない）。 ※西洞院時慶が毛利秀元・安国寺恵瓊・石田正澄等の衆の軍勢は多かった、と記したのは西洞院時慶がそれらの軍勢を実際に見たからであろう。</p>	時慶記2-87～88頁
7月24日	<p>北政所が小早川秀秋の祈念のために御千度のことを命じ、200疋を下されたので申し付ける（北野天満宮）。</p>	北野社5-281頁
	<p>伏見での鉄炮の音が京中に響く。 ※伏見城攻めの鉄炮の音が京都市中で聞こえるということは、かなりの大音響であったことがわかる。</p>	孝亮宿-730頁
	<p>大津城は宇喜多秀家に渡す、ということである。ただし、（この話については）真実かどうか知らない。毛利（輝元）が瀬田橋に城を用意した、ということである。伏見城は堅固に持っている。このあたりが迷惑なのは、この時である。 ※大津城を宇喜多秀家に渡すということは、この時点（7月24日）で早くも大津城の城主・京極高次について豊臣公儀に反逆する動き（家康方への寝返りなど）があった、ということか？とすると、この動きは通説よりも時期的に見て早いということになる。或いは、今後西上が予想される家康方の軍勢を迎撃するために大津城を豊臣公儀が接収する、という意味にとることもできる。なお、「（慶長5年）7月24日付中川秀成宛松井康之書状」には、京極高次が伏見（家康家臣の鳥居元忠が籠城した伏見城のことを指す）と持ち合わせて（示し合わせて、という意味か？）、家康へ別儀がないことが記されており（神戸大学文学部日本史研究室編『中川家文書』、臨川書店、1987年、88号文書）、7月24日の時点で京極高次が家康に味方して</p>	義演准2-204頁

	いることが報じられている。よって、京極高次が家康に味方して豊臣公儀に反逆する意志を明確にしたのはいつなのかという点については今後通説を再検討する必要がある。	
	伏見城に対して夜中に鉄炮を撃つ。	言経卿10-194頁
	西洞院時慶が京に帰った。伏見城に対する鉄炮の音が絶え間ない。 ※これまでの上記の記載から見てもわかるように、豊臣公儀の軍勢は伏見城に対して相当な規模で鉄炮を撃っていることがわかる。	時慶記2-88頁
7月25日	小早川秀秋の制札を当所(醍醐)の南北の構えに打つ。(その文言は)一、濫妨狼藉の事、一、伐採竹木の事、一、田畠菟取の事、(であり、これを)寺領へ写して遣わした。毛利秀元が数万で近江へ進発した。(これは)東国(からの軍事的侵攻を)防ぐためである。 ※なぜ大老の毛利輝元や三奉行の制札ではなく小早川秀秋の制札を掲げたのか考察する必要がある。 ※毛利秀元が数万で近江へ向けて進発し、今後西上が予想される家康方の軍勢を迎撃しようとしたことがわかる。豊臣公儀(石田・毛利連合政権)は、この時点(7月25日)で早くも家康方軍勢の西上を想定していたことがわかる。	義演准2-204頁
	伏見城に対して夜中に鉄炮を撃つ。	言経卿10-195頁
7月26日	毛利(輝元)の内義より湯立(豊国社)。	舜旧記1-235頁
	毛利輝元より毎月の祈念料9貫文が来る(北野天満宮)。	北野社5-283頁
	伏見城が落ちない(ことへの)懸念(がある)。家康が大和路へ出陣する旨の風聞がある、ということである。(毛利輝元が築城した)瀬田城が完成した。 ※瀬田城については本稿の7月24日の項を参照。	義演准2-204頁
	伏見城に対して終夜毎夜、鉄炮を撃つ。	言経卿10-196頁
7月27日	伏見城が落ちない(ので)大鉄炮(「大鐵放」)をもって攻める、ということである。丹後の細川忠興は、この度、家康に共奉(供奉カ)して、関東へ下った。よって、(秀頼様の)御敵に伏せられた(ので)、丹後へ数万(の軍勢)が向った。(細川方は丹後では)ただ一城(田辺城)になり、近日には落城するであろう、ということである。槇嶋にも(毛利輝元によって?)城が完成したという風聞である。 ※家康に従って関東へ下向した細川忠興は「御敵」になった、という記載は注目される。この場合の「御敵」というのは秀頼様の「御敵」という意味であろう。つまり、「内府ちかひの条々」によって、家康が秀頼様の敵になったので、家康に従った細川忠興も秀頼様の敵になった、という理屈であろう。 ※「伏見城が落ちない(ので)大鉄炮(「大鐵放」)をもって攻める」ということは、大鉄炮は城の構造物の破壊について、鉄炮よりも効果がある、という意味であろう。	義演准2-204頁
	伏見城に対して夜中に鉄炮を撃つ。	言経卿10-196頁
7月28日	北野天満宮の祠宮・松梅院が丹後へ細川幽斎の見舞いに使者を遣わす。	北野社5-283頁
	辰の刻(午前8時頃)に濫妨人140~150(人)が、金剛輪院桜馬場まで押し入り、まず伏見城攻めの用と称して竹を伐り取る旨を申し掛けてきた。 しかし、そのことを認めず、侍共が出て立ち向かい門を閉じて戦っ	義演准2-205頁

	た。早鐘を突いて、当郷（醍醐）の民が武具にて蜂起して大事に及んだので、その賊徒は種々懇望して何もせずに帰った。（こうした結果になり）このことに安堵した。 ※この騒動は、小早川秀秋の制札（本稿の7月25日の項を参照）が役に立たなかったことを意味する。	
	伏見城に対して鉄炮を撃つ。	言経卿10-196頁
7月29日	大坂へ制札を取りに遣わした。 ※昨日の騒動で小早川秀秋の制札（本稿の7月25日の項を参照）が役に立たなかったため、大坂（7月晦日条を見ると、三奉行の制札であることがわかる）の制札が必要になった、ということであろう。大老の毛利輝元ではなく、豊臣秀頼でもなく、三奉行の制札ということは、石田・毛利連合政権（豊臣公儀）の最高実務担当者は大坂の三奉行であったことがわかる。このことは、石田・毛利連合政権の実態を考えるうえで重要である。	義演准2-205頁
	伏見城を攻める。	言経卿10-197頁
7月30日	夜に入り、伏見城内の松の丸が焼ける。	舜旧記1-235頁
	伏見で鉄炮（の音）が聞こえる。今夜、寅の刻（午前4時頃）に（伏見城の）松の丸が焼亡した。その時、松の丸は攻め落とされた、ということである。	孝亮宿-730頁
	伏見城は夜中に松の丸・名護屋丸等が焼失した。夜中に（伏見城に対して）鉄炮を撃つ。 ※豊臣公儀の軍勢が伏見城に対して、夜間攻撃をしていることがわかる。 ※伏見城における松の丸（「松ノマル」）・名護屋丸（「ナコヤ丸」）の存在がわかる。	言経卿10-197頁
7月晦日 （=30日）	（大坂の）三奉行衆の制札が来た。（その文言は）一、軍勢甲乙人乱妨狼藉事、一、放火事、一、山林竹木伐取事、付、田畠立毛苧取事（である）。	義演准2-205頁
8月1日	伏見城が落ちる。籠城した大将の鳥居元忠が自害した。そのほかの軍兵も討死した。城はすべて焼けた。	舜旧記1-235頁
	今日、伏見本城が焼けて、（籠城した大将の）鳥居元忠が腹切りをした、とのことである。	北野社5-284頁
	昨夕、（伏見城の）松の丸は焼けた、とのことである。	北野社5-284頁
	子の刻（真夜中の12時頃）、伏見城松の丸を焼き立てて攻め入った。（その）猛火は昼のようであった。義演は（この様子を）長尾山で見物した。辰の刻（午前8時頃）、本丸の月見櫓を火矢にて焼き立て、それより千畳敷・櫓以下、南を指して焼き、（それから）西へまわって焼いた。巳の末刻（午前11時頃）天守の上の重より焼け出し、午の刻（昼の12時頃）に焼け果てた。（伏見城に）籠っていた衆は方々に追い散らされて首を取られた、ということである。六十余州の諸侍が3ヶ年普請に苦勞した（伏見）城が、およそ三時（約6時間）ばかりで滅んだ。或いは、金物以下、或いは、結構な道具等もばらばらになった。（こうしたことは）夢の如くである。 ※伏見城攻めに火矢を使用している点に注意すること。伏見城における月見櫓（「月見矢藏」）・千畳敷・櫓（「矢藏」）・天守（「殿守」）などの建築物の存在がわかる。伏見城における本丸・松の丸（「松丸」）	義演准2-205～ 206頁

	<p>の存在がわかる。真夜中に伏見城攻撃をしている点に注意すること。義演は長尾山で真夜中に伏見城攻めを見物している点に注意すること。義演にとって伏見城攻めとその落城が見物の対象であった点に注意したい。</p>	
	<p>伏見城が落城した。寄手勢3000人程が負傷した。(伏見城は) すべて焼けた。(こうしたことは) 言語道断であり、説明できない、ということである。 ※伏見城攻めにおいて、寄手の軍勢のうち負傷者だけで3000人程という点に注意したい。</p>	言経卿10-198頁
	<p>今晚、伏見城が焼けた。今朝、攻め落として城守(伏見城を守っていた城将)を討ち果たした。(これは) 小早川秀秋の手柄とのことである。(伏見城を攻め落としたあと?) 島津義弘・宇喜多秀家等は大坂へ行った、とのことである。石田三成は、一昨日(7月29日)に大坂へ行ったという風聞である。 ※伏見城を攻め落としたあと、豊臣公儀方の諸将が大坂城に集結した、ということか? これは、伏見落城後、一旦、豊臣公儀方の諸将を大坂城に集結させて、新しい軍事作戦に切り換える目的があったためか?</p>	時慶記2-90頁
8月2日	<p>毛利輝元より里神楽を執行。北政所より湯立(豊国社)。</p>	舜旧記1-235頁
	<p>伏見(城)本丸が落居(落城)し、大将の鳥居元忠一人が(伏見城の)本丸において切腹した。家々は焼亡し、手負い・死人等は数知れず(限りなく多い)。洛中の遊民は見物のために伏見へ向かい、(そのため)盗賊等が数多くいた。</p>	孝亮宿-730頁
	<p>伏見城を群集が見物している、ということである。(伏見城の)宮殿楼閣は善を尽し、美を尽し、およそ咸陽宮に及び難いか。(これが)片時(一時の半分)の間に灰燼になった。浮雲の世間の眼を遮り、悲しむべし、悲しむべし。明日は豊臣秀頼の御誕生日である。よって、御祈祷として、不動供百座、山上山下支配を仰せ触れた。 ※焼けた伏見城を群集が見物している点に注意すること。 ※豊臣秀頼の誕生日は8月3日であることがわかる。</p>	義演准2-206頁
	<p>昨日の一日に伏見城が落城した。伊賀の城を(留守居の家臣が)増田長盛に渡した。(伊賀の城の城主である)筒井定次は(上杉討伐のため)関東へ出陣していた。よって留守居衆の十市・布施・片岡そのほか少々が(伊賀の城に)いたが、(城の明け渡しは)しかなかった。 ※筒井定次の居城である伊賀上野城を、定次の留守中に四奉行の一人である増田長盛が受け取った、ということは、豊臣公儀(石田・毛利連合政権)が家康方になった筒井定次を改易にしたことを意味しており、その点で注目される。</p>	中臣祐1-74頁
8月3日	<p>豊臣秀頼より御祈祷(豊国社)。</p>	舜旧記1-236頁
	<p>義演が豊臣秀頼の御祈祷をおこなう。伏見城より落ちた者(落武者)を搦めて出すように(大坂の)奉行より申して来た。もし在々にいるのかどうか、寺領分に堅く仰せ触れた。 ※大老の毛利輝元ではなく、大坂の奉行が伏見城からの落武者狩りを命じている点に注意すること。このことは石田・毛利連合政権の実態を考察するうえで重要である。</p>	義演准2-206頁

	西洞院時慶から島津義弘へ昨日書状を遣わしたところ、本日、返報がきた。	時慶記2-91頁
8月4日	<p>家康の上洛は、なかなかし難い旨の風聞がある。近日、出陣衆（上杉討伐に出陣した上方の大名という意味）は帰ってくる、ということである。伏見城の奉行である石田正澄・新庄直定は金銀を炭の中から掘り出している、ということである。或いは、唐物の重宝、或いは、絹綿類の焼失はその数を知れず、ということである。</p> <p>※8月4日の時点で、家康の上洛がなかなか実現しない旨の風聞があったことは、この時点（8月上旬）での家康の苦境を伝えている。近日、出陣衆（上杉討伐に出陣した上方の大名という意味）が帰ってくる、としている点は、上杉討伐の中止がこの時点（8月上旬）で都では明らかになっていたことを示している。近日帰ってくる予定の出陣衆（上杉討伐に出陣した上方の大名という意味）と大坂奉行衆との対戦を予想する記載がない点は、出陣衆（上杉討伐に出陣した上方の大名という意味）と大坂奉行衆は対立しておらず、家康だけが江戸に残って孤立していることを示している。</p> <p>※石田正澄・新庄直定が、落城後の伏見城の奉行であった点は注目される。</p>	義演准2-206頁
	<p>午の刻（真昼の12時頃）に西洞院時慶が島津義弘を見舞いに伏見へ行き、対面して帰った。（伏見）城の跡の焼けた様子は哀れであり、死体や骨が多かった。</p> <p>※8月4日の時点で、島津義弘は伏見にいたことがわかる。</p>	時慶記2-92頁
8月5日	<p>毛利（家）内の安国寺恵瓊が尾張へ1000人ばかりで出陣した、ということである。（安国寺恵瓊は）当郷（醍醐）を通った。長束正家は伊勢口へ出陣した、ということである。石田三成は本城である佐和山（城）へ行った、ということである。（石田三成はこれから）出陣する、ということである。</p> <p>※尾張へ出陣したとしている安国寺恵瓊の兵力数が1000人ばかりであったことは注目される。ただし、実際には安国寺恵瓊が出陣したのは尾張ではなく伊勢である。</p> <p>※8月5日の時点で、石田三成はこれから佐和山城より出陣する予定、としていることは注目される。また、8月5日に安国寺恵瓊・長束正家・石田三成が一斉に出陣のために動いていることは注目される。</p>	義演准2-207頁
8月6日	豊国社湯立。豊臣秀頼より立願（豊国社）。	舜旧記1-236頁
8月7日	<p>豊臣秀頼の御所御祈りとして、大般若経の真読を来る（8月）10日より執行すべき旨の御使い（が義演のころへ来た）。（これは）天下静謐、（秀頼の）御武運長久の（ための）御祈りである。</p> <p>※天下静謐の祈りを秀頼が義演に命じた、ということは秀頼が天下人（当時の最高権力者）であったことを明確に示している。</p>	義演准2-207頁
8月8日	<p>（以下のことを）伝え聞いた。去る（8月）3日、越前国と加賀国の堺にある大聖寺という城は山口正弘が城主であり、京御方（豊臣公儀方）である。（この大聖寺城に対して）前田利長が攻撃して落城し、山口正弘（山口宗永）は自害した、ということである。珍しいこと（である）。</p> <p>※山口正弘について、「京御方」と表記している点に注意すること。「京御方」という表記は、京都は首都なので豊臣公儀方という意味と考えられる。</p>	義演准2-207頁

	※山口正弘が 8 月 3 日に自害した、というのは情報としては正確である。	
	夜番を申し付けた。(その理由は)この度は世上が物騒なためである。	言経卿10-200頁
8 月 9 日	(以下のことを) 伝え聞いた。家康が出馬して上洛する、ということである。	義演准 2-207頁
8 月 10 日	大坂城の火事消除の祈祷のことを (秀頼から義演に対して) 命じられ、施物として黄金10両を賜った。	義演准 2-208頁
	(豊臣公儀方の) 諸大名衆が出陣とのことである。京極高次は北国の堅田まで行く、とのことである。 ※ 8 月 10 日の時点で豊臣公儀方の諸大名衆が出陣する点に注意すること。8 月 1 日の伏見城落城後、8 月上旬に新たな軍事攻勢が計画されたという意味であろう。	時慶記 2-94頁
8 月 11 日	義演が大坂 (城) の火災 (消除) の祈祷をおこなった。火災札を大坂へ進上した。蜂須賀家政の子息 (蜂須賀至鎮) は、さきごろ家康の出陣 (上杉討伐) に共奉 (供奉カ) し、親 (蜂須賀家政) は大坂にいた。この度の一乱に迷惑に及び、これにより、(蜂須賀家政) まずは逼塞の分、ということである。よって、(蜂須賀家) の家臣の頭共が、秀頼様の馬廻になって北国へ出陣し、今日、当郷 (醍醐) に陣取りをした。蜂須賀家政は秀吉 (「大閣様」) の根本の長衆 (股肱の臣という意味か?) であり、阿波一同 (一円カ) を御扶持としている。	義演准 2-208頁
	西洞院時慶から豊臣秀頼・毛利輝元・前田玄以・増田長盛へ祖神への祈念の祓札を遣わした。西洞院時慶から前田玄以、安国寺恵瓊等へ書状を遣わした。 ※このことから 8 月 11 日の時点で豊臣秀頼・毛利輝元・前田玄以・増田長盛は大坂城にいたということが推測できる。 ※このことから 8 月 11 日の時点で安国寺恵瓊は上方にいた可能性も考えられる。	時慶記 2-94頁
8 月 12 日	西洞院時慶から豊臣秀頼・毛利輝元・増田長盛・前田玄以へ平野の祓御札を進上した。 ※このことから 8 月 12 日の時点で豊臣秀頼・毛利輝元・前田玄以・増田長盛は大坂城にいたということが推測できる。	時慶記 2-95頁
8 月 13 日	夜前、武士衆の足弱 (女、子供) をとらえたところ、大坂より取り返すことについて御気遣いがあった、とのことである。	時慶記 2-95頁
8 月 14 日	西洞院時慶に対して、前田玄以からは返書があったが、増田長盛からは取り紛れのため一報はない。西洞院時慶から安国寺恵瓊へ書状を遣わす。	時慶記 2-95頁
8 月 15 日	宇喜多秀家が 1 万人で出陣した、ということである。(宇喜多秀家の軍勢が) 当所 (醍醐) を通った。 ※宇喜多秀家の軍勢の人数 (1 万人) と出陣した日 (8 月 15 日) がわかる点は重要である。	義演准 2-209頁
	天下無事のことを禁裏 (後陽成天皇) が仰せ出される、とのことである。広橋兼勝 (権大納言)・勸修寺光豊 (参議) 両人を大坂へ明日遣わす (予定である)。	時慶記 2-96頁

	<p>※『史料綜覧』巻13、慶長5年8月16日条（東京大学出版会、1982年復刻、247頁）は「権大納言広橋兼勝・参議勸修寺光豊ヲ大坂ニ遣シ、豊臣秀頼ヲシテ、和ヲ講ゼシメラル」（下線引用者）としている。『大阪編年史』3巻、慶長5年8月16日条（大阪市立中央図書館、1967年、160頁）の網文は「権大納言広橋兼勝・参議勸修寺光豊ヲ大坂ニ遣シ、秀頼ニ勅シテ東西兵ヲ止メ、和ヲ講ゼシム。」（下線引用者）としている。この場合の「天下無事」の「無事」は有事の反対語で平和（戦争がない状態）を指すと考えられる。よって、「天下無事」＝天下平和という意味になる。</p>	
8月17日	<p>伊勢へ8万騎が出陣し、北国へ3万余が出陣した、ということである。 ※伊勢方面、及び、北国方面へ出陣した月日と兵力数がわかる点は注目される。</p>	義演准2 - 210頁
	<p>西洞院時慶が近衛信尹のところへ参上した時、大坂（豊臣公儀）と家康の間の□（扱カ）のことを聞かされ、数刻（数時間）伺った。西洞院時慶が吉田兼見・兼治父子へ人を遣わしたが、丹後（細川幽齋）のことも心許ない旨を言っていた。 ※時慶記-2、97頁では、□の箇所について「拵」と推定しているが、時慶記-2、104頁（9月7日条）では「天下扱之義」と記されているので、このことを参考にすれば、□の箇所について「扱」（和睦という意味）と推定した方がよいように考えられる。 ※この場合、重要なのは、大坂（豊臣公儀）と家康を対比して述べていることである。よって、豊臣公儀VS家康の戦いであり、決して石田三成VS家康の戦いでないことがわかる。</p>	時慶記2 - 97頁
8月18日	<p>早朝に北政所が豊国社へ参詣。大谷吉継についての記載もある。 ※大谷吉継については、「刑部少輔、樂人、如常奏之」という記載がある。しかし、（豊国社へ）「社参」とは記されていないので、この日（8月18日）、大谷吉継が豊国社へ社参したのではなく、大谷吉継の代理による代参と考えられる。ちなみに、同日、豊国社へ社参した北政所については、「社参」と明記されている。</p>	舜旧記1 - 238 ~ 239頁
	<p>豊国大明神の祭礼。豊国社の結縁灌頂を内々に執行するつもりであったが、天下は物騒なので、そのことはなく無念である。</p>	義演准2 - 210頁
8月19日	<p>宇喜多秀家の内儀より湯立を執行（豊国社）。</p>	舜旧記1 - 239頁
	<p>豊国大明神の前において、神事能があり、二條殿が行き見物した。</p>	孝亮宿 - 730頁
	<p>豊国大明神の祭礼。今日は猿樂があり、諸人が見物した。</p>	義演准2 - 210頁
8月20日	<p>宇喜多秀家の祈念を申し付けた（豊国社）。</p>	舜旧記1 - 239頁
	<p>（前文欠）以下400駄を伏見より大津へ三郷として付けるべき旨を（大坂の）奉行より申して来た。よって（途中の文欠）100人を出すべき旨を仰せ触れた。</p>	義演准2 - 211頁
8月21日	<p>家康が8万騎を率いて上洛するという風聞がある。上杉景勝・伊達政宗・最上義光・佐竹義宣は一味（仲間）、ということである。これは京御方（豊臣公儀方）である。（本文横の義演による注記）景勝は「ナカウ」（長尾）のことである。政宗は「伊達侍」のことである。 ※通説では家康方とされている伊達政宗・最上義光についても「京御方」としている点は注目される。「京御方」という表記は、京都が首都なので豊臣公儀方という意味と考えられる。京御方という表記は8月8日条（義演准-2、207頁）にも出てくる。 ※8月21日の時点での家康の上洛とその兵力数の風聞も注目される。</p>	義演准2 - 211頁

	<p>織田信雄は尾張国を本国として（秀頼から）返され遣わす、とのことである。中院通勝・富小路秀直・八条宮智仁親王の（侍臣）大石甚介が、丹後国の拵（和睦）のことについて、大坂（城）の前田玄以のところへ行つた、とのことである。</p> <p>※8月21日の時点で、織田信雄が尾張国を本国として返される、という記載は注目される。このことは、尾張清須城主の福島正則が豊臣公儀（石田・毛利連合政権）から改易されることを意味する。また、豊臣公儀（石田・毛利連合政権）が知行宛行権を行使して尾張国主をすげ替えることを実行しようとした、という点でも重要である。こうした動きが出てきた背景には、8月21日の時点で、福島正則は豊臣公儀に敵対すること（家康に味方して家康方の部将として軍事行動をおこなうこと）が明白になった（決定的になった）からであろう。ちなみに、岐阜城攻城戦は8月23日である。</p> <p>※織田信雄はもともと尾張国清須城主であったが天正18年に転封を拒否したため豊臣秀吉から改易された、という経緯があるので、本国として返され遣わす、という記載になったと思われる。</p>	時慶記 2 - 99頁
8月22日	（以下のことを）伝え聞いた。伊勢松坂城を京衆（豊臣公儀の軍勢）として攻めている、ということである。（伊勢松坂城の）城主は古田重勝である。	義演准 2 - 211頁
8月24日	毛利輝元より毎月の祈念料9貫文が来る（北野天満宮）。	北野社 5 - 287頁
	丹後は一城（細川幽斎が城主の田辺城）（だけ）になった、ということである。	義演准 2 - 211頁
8月25日	尾張方面で合戦があった、と午の刻（真昼の12時頃）に風聞があった。※尾張方面で合戦があった、というのは誤報であり、家康方の諸将による岐阜城攻撃（8月23日）のことを指すと考えられる。とすると、2日後には京都の義演の耳に入ったことになる。	義演准 2 - 211頁
	岐阜（城）の合戦は負けた、とのことである。また、土地（その地方）からもその旨を言ってきた。 ※西洞院時慶が、岐阜（城）の合戦は負けた、と記していることは、豊臣公儀の立場から見ていたことになる。その点は興味深い。	時慶記 2 - 100頁
8月26日	佐和山城へ石田三成が帰陣して退却した、ということである。岐阜の城に雑説がある。鉄炮・玉薬（この「鐵放・玉薬」の記載は塗抹されている）（以下の文も塗抹されている）。	義演准 2 - 212頁
8月27日	物騒により（以下の文は省略する）。（前文は塗抹されている）出陣祈念として銀子3枚が（義演のところへ）到来した。 ※出陣祈念を依頼した人物名は前文が塗抹されているためわからないが、家康と敵対する豊臣公儀方の部将と推測される。とすると、8月27日の時点で出陣祈念を依頼するということは、この時期にあらたに出陣する豊臣公儀方の部将がいたことになる。前文が塗抹されているのは、豊臣公儀方の部将であったため、関ヶ原の戦い後、こうした記載が不都合になり塗抹した可能性も考えられる。	義演准 2 - 212頁
	小早川秀秋への注進の話として聞いた分は、伊勢安濃津城は降参し、（城）主（富田信高）は高野山に住む（ことになった）。松坂城はそのまま佯言が済んだ。（よって、伊勢方面の毛利家の）軍勢は手明きになり、尾張方面へ遣わす（ことになった）。（合戦に負けた）岐阜は町を焼き払い、東国衆（家康方の諸将）は手強い、とのことである。	時慶記 2 - 101頁

	※西洞院時慶が、東国衆は手強い、と記していることは、豊臣公儀の立場から見ていたことになる。その点は興味深い。	
8月28日	城（京都新城）の櫓（「矢倉」）を下した（破壊した、という意味か？）、とのことである。西洞院時慶が、八条宮智仁親王の（侍臣）大石甚介のところへ人を遣わしたところ、いまだ丹後から上洛していない（のでいない）とのことである。西洞院時慶が飛鳥井雅庸へ使者を遣わし、伊勢のことは心許ない旨を申し遣わした。	時慶記2-101頁
8月29日	京都城（北政所がいる京都新城）を今日から破る（破壊する）、ということである。（その理由は）禁裏の御近所のためである。（このことは）珍重である。種々雑説があり物騒である。 ※北政所が御所に近い京都新城を破壊したのは、その時期の戦乱と関係するのかどうか検討する必要がある。	義演准2-212頁
	去る（8月）23日、美濃国岐阜城において合戦があった、ということである。織田秀信（岐阜城主）の生死はわからない、ということである。 ※この場合、岐阜城攻撃の報が京に伝わったのは6日後の29日だったことがわかる。	言経卿10-209頁
	南城（北政所がいる京都新城）の塀・石垣を壊す、とのことである。城（京都新城か？）の石を西洞院時慶が所望したが、できない旨を言われた。	時慶記2-101頁
9月1日	西洞院時慶が城（京都新城か？）へ人を遣わした。板屋左近丞・榎並助丞へ平野宮（平野神社）の石据えの用として申し遣わしたところ、同意した。また、板屋左近丞へ（人）を遣わして、石に印（刻印のことか？）をさせた。佐和山方面へ東国衆（家康方の諸将）が来て所々に放火した、とのことである。	時慶記2-102頁
9月2日	西洞院時慶が城（京都新城か？）の石を取り寄せるために人を遣わした。板屋左近丞・二郎兵衛の両人が奉行として、紫竹（からの人足）2（人）・押小路師生の下人1（人）・この方の2人以上、また日用により、午の刻（真昼の12時頃）から10人で持たせた。照高院へ（行き）綱・棒を拝借した。西洞院時慶自身が城中へ行って（石を取る作業を）見た。西洞院時慶は普請のところに夕までいた。	時慶記2-102頁
9月3日	（以下のことを）伝え聞いた。丹後の細川幽斎は城（田辺城）を近日（豊臣公儀の軍勢に）渡す予定であり、（その理由は）兵糧が尽きた（から）、ということである。（田辺城の開城については）八条宮（智仁親王）よりの御扱（和睦）である。 ※田辺城の開城について、兵糧が尽きた、としている点は興味深い。	義演准2-214頁
	大津城へ（城主である）京極高次が（帰って）来て、毎日、合戦をおこなっている。負傷（者）については、数えきれないほど多い。城あたりへの放火は左右方よりおこなっている。	義演准2-212頁
	早朝より石を持たせた。紫竹（からの人足）2人、舟橋秀賢から下人1人、日用10人にて石共をすべて取った。丹後へ細川幽斎の扱（和睦）のため、日野輝資・中院通勝・富小路秀直が同道して下国した。	時慶記2-103頁
9月4日	大津城について雑説がある。 ※この雑説とは、大津城の城主（京極高次）が敵側（家康側）になる、という内容のものと推測される。	義演准2-215頁

	山科言経が藤井宗珍を呼び、世上の合戦のことを聞いた。	言経卿10-212頁
	<p>大津（城）のことは咲止（^{マヤ}）（=笑止〔困ったこと、という意味〕）といううわさがある。城主（京極高次）が帰城した（とのことである）。（京極高次には）脇坂（安治）そのほかが同心している（とのことである）。</p> <p>※京極高次に脇坂安治などが同心している、という記載は注目されるが、その後、脇坂安治が大津城に籠城した、というような記載は公家等の日記には一切出てこないで単なる噂レベルのものであった、と考えられる。その証左として、後述のように、9月13日に西洞院時慶は脇坂安治に書状を出しているが、仮にこの時点（9月13日）で脇坂安治が豊臣公儀に敵対して大津城に籠城していたとすれば、西洞院時慶が脇坂安治に書状を出すことはとてもできなかったであろう。</p>	時慶記2-103頁
9月5日	<p>大津城は（豊臣公儀の）敵になったので、（大津城攻めのために）石山より笠取坂へ人数（軍勢）が通った。（これは）前代未聞のことであり、驚き入るものである。</p> <p>※義演が家康側を豊臣公儀の敵ととらえている点は興味深い。</p>	義演准2-215頁
	大津（城）のことは世上に騒がしい。	時慶記2-104頁
9月6日	<p>大坂より軍兵が当所（醍醐）へ来た。陣取りをすることへの気遣い（懸念）がある。</p>	義演准2-215頁
	<p>大津城へ毛利輝元が人数（軍勢）を遣わして、城を受け取る予定である、とのことである。烽火があがった。</p> <p>※大津城受け取りと烽火があがったことは関係するののか？</p>	時慶記2-104頁
9月7日	今日、昨日、大津が焼ける。	北野社5-289頁
	大津（城主の）京極高次が心変わりをした、とのことで、毛利元康が（大津へ）出陣した。	北野社5-289頁
	（醍醐での）陣取り衆は早朝に出立し、横峰（峠）越えの人数（軍勢）もいた。（今後の展開は）不慮次第である。午の刻（真昼の12時頃）に少し大津で焼き立てられ、申の刻（午後4時頃）に止まった。	義演准2-215頁
	<p>大津の町近辺が昨日・今日放火された。</p> <p>※伏見城攻めの場合も同様であるが、城攻めの際には攻城側が放火している点に注意したい。</p>	言経卿10-213頁
	<p>（大津城では）三井寺の衆を城へ人質に取っている、とのことである。西洞院時慶が近衛信尹のところへ参上して御目にかかった。（その内容は）天下の扱（和睦）のことについてである。大津（城）に対する扱（和睦）（の使者として）孝蔵主が遣わされ、木食応其も同道したが、（和睦交渉は）破れて（大津城の）城外に放火した、とのことである。</p> <p>※9月7日の時点で、天下の扱（和睦）について公家同士で話し合っていることは注目される。</p>	時慶記2-104頁
9月8日	<p>大津城攻めがあり、鉄炮（の音）が響き、地を動かした。焼煙は霧のようである。（大津の）町はすべて焼き払われた、ということである。</p> <p>※大津城攻めの鉄炮の音がかなりの大音響であったことがわかる。</p>	義演准2-215頁
	大津城を攻めた。	言経卿10-214頁

	西洞院時慶が城（北政所がいる京都新城か？）へ人を遣わした。（和睦の使者として大津城に遣わされていた）孝蔵主が大津から帰京した。扱（和睦）は破れて、鉄炮が放たれて難儀のところを帰った、とのことである。	時慶記2-105頁
9月9日	暮れに及び、北政所が豊国社へ参詣。	舜旧記1-241頁
	「能札」（人名）が大津城攻め（をしている）毛利元康の見舞いに行く、ということ述べた。 ※北野社-5、291頁に「役者能松」とあるので、「能札」は役者なのか？北野社-5、70～72頁に「役者」としての「能札」が出てくる。	北野社5-290頁
	（前文省略）物騒（後文省略）。（前文省略）不慮の天下大乱（後文省略）。 ※慶長5年のこうした一連の戦乱を、義演が「不慮天下大乱」と記しているのは興味深い。	義演准2-216頁
	西洞院時慶が近衛信尹のところで数刻（数時間）酒を飲む。（その時、聞いたところによると）天下無事の御談合（相談）があった、とのことである。 ※「御談合」と「御」を付けているので、自分（西洞院時慶）が近衛信尹と談合したのではなく、他のところで「御談合」があったことを西洞院時慶が近衛信尹から聞いた、という意味になる。9月9日の時点で、天下無事の御談合（相談）があった、ということは注目される。	時慶記2-105頁
9月10日	西洞院時慶が照高院道澄のところへ見舞いに訪れた時、大津の城攻めのことを聞いた。	時慶記2-105頁
9月11日	（大津城攻めに出陣する）杉若無心の御出陣が明日まで延びる。北野天満宮の祠官・松梅院が杉若無心に（出陣の）餞別を送る。	北野社5-290頁
	当郷（醍醐）に陣取りをした衆が小野の竹を伐った。ことわり（伐採禁止のことを指すと思われる）を（申し）遣わしたが、多人数にて（竹を）伐った。	義演准2-216頁
9月12日	（大津城攻めに）杉若無心が御出陣。北野天満宮の祠官・松梅院が供をして大津まで送る。今夜は坂本に泊まる。	北野社5-290頁
	これより先、御料所内に陣を張り狼藉をした（者がいた）。よって、この日、前権中納言・毛利輝元に御料所を毀損してはいけない旨を仰せ下された。	後陽成1-281頁
	山科の御代官衆が来て、この度の陣により皆々が御料所に陣取りをして荒らしていると「長はし」まで知らせてきた。よって、勧修寺光豊を召して、（毛利）輝元へ別儀のないようにと（後陽成天皇から）仰せ下された。	お湯殿9-172頁
	大津城合戦が終わった。今日敗北した、ということである。（城主の）京極高次は和睦に応じた、ということである。	言経卿10-216頁
	西洞院時慶が紫竹へ真木を添えて下人を遣わして、人足のことを触れた。平野（神社）の礎の石（礎石）を紙屋川まで車にて運んだ。	時慶記2-106頁
9月13日	今朝、大津城三の丸へ（毛利元康が）乗り込む。杉若無心も同様である。	北野社5-290頁
	今晚、北野天満宮の祠官・松梅院が大津より帰る。	北野社5-290頁
	大津城三の丸へ攻め入った、ということである。	義演准2-216頁
	禁中の東南方の秀頼卿御城（京都新城）の南面の御門を崩した。内堀については先日崩した。	言経卿10-217頁

	<p>西洞院時慶が大坂（城）の前田玄以のところに見舞いとして真木を遣わした。西洞院時慶が脇坂安治へ書状を遣わした。西洞院時慶が島津義弘、島津義久へ書状を遣わした。</p> <p>※9月13日は関ヶ原の戦いの2日前にあたるが、その時点で前田玄以は大坂城にいたことがわかる。西洞院時慶が脇坂安治、島津義弘に書状を出したということは、9月13日の時点で西洞院時慶は脇坂安治、島津義弘がどこにいたのか知っていたことになる。通説からすると、この時点で島津義弘は大垣城にいたと考えられるが、脇坂安治のいた場所は不明である。</p>	時慶記 2 - 106頁
	<p>大津城が落城した。(大津城の) 大将である京極高次は高野山へ登山することになった。多く(の者が、敵味方) 双方で戦死した、ということである。</p>	中臣祐 1 - 80頁
9月14日	<p>大津城が落ち、(城主の) 京極高次は高野山に住居。</p>	舜旧記 1 - 242頁
	<p>北野天満宮の祠官・松梅院が、樽・重箱・餅を持参して杉若無心の見舞いに行く。</p>	北野社 5 - 290頁
	<p>今日、大津城(の攻防)について、扱い(和睦)があり、双方矢止め(休戦)になった。</p>	北野社 5 - 290頁
	<p>大津(城)の京極(高次)は、家康の一味なので、(大津)城二の丸まで攻め込んだ。しかし、北政所より眞常(織田常眞〔信雄〕カ)・東玉の両人が大津(城)へ遣わされ、扱い(和睦)になったので、鉄炮(の音)は止んだ。予(小槻〔壬生〕孝亮)は見物に向かった。</p>	孝亮宿 - 730頁
	<p>義演が大坂下向の用意として、風呂を焼く。</p>	義演准 2 - 216頁
	<p>真木が大坂から上洛して前田玄以の返事を持ってきた。正親町季秀が西洞院時慶のところへ来て、大津(城)のことを尋ねた。</p>	時慶記 2 - 106 ~ 107頁
9月15日	<p>美濃堺の柏原(美濃国関ヶ原カ)において、家康の先勢である福田(福島正則カ)・細川忠興・加藤嘉明が合戦をおこなった、とのことである。</p> <p>□大□(谷カ)の軍勢は敗北し、大谷吉継は討死した。(これは)小早川秀秋の反逆によるものであり、巳の刻(午前10時頃)であった。佐和山城が落城した。</p> <p>※家康の先勢が合戦をおこなった、としている点に注意すること。</p>	舜旧記 1 - 242頁
	<p>大津城は毛利元康が受け取った。</p>	北野社 5 - 291頁
	<p>杉若無心も今日(大津城攻めから)帰陣した。</p>	北野社 5 - 291頁
	<p>義演が大坂下向のため、寅の刻(午前4時頃)に門を出て、伏見京橋より舟に乗り、申の刻(午後4時頃)に大坂の法安寺に着いた。</p>	義演准 2 - 216頁
	<p>美濃大垣・赤坂等(関ヶ原カ)において大合戦があり、家康が出陣してきた、ということである。(この戦いは)家康が勝った。小早川秀秋は(家康に)同心した、ということである。宇喜多秀家は敗北して、後日自害した。</p> <p>※主決戦がおこなわれたのは、大垣・赤坂ではなく関ヶ原(正確には山中)である。</p> <p>※宇喜多秀家が後日自害した、としているが、これは誤報である。</p>	言経卿 10 - 218頁
	<p>平野(神社)へ石を車にて遣わした。裏の土居道は少し広く、土を方々へ持たせて遣わした。地形を直した。曼殊院良恕より西洞院時慶のところへ使者が来て、陣の祝いの有無について(質問されたので)、聞いていない旨を述べた。飛鳥井雅庸から西洞院時慶のところへ使</p>	時慶記 2 - 107頁

	<p>者が来て、陣のことについて心許ない旨を述べたので、この方も同様である旨を述べた。北政所の御内へ内儀から孝蔵主のことを尋ねるために人を遣わしたが、(孝蔵主は)いまだ大津から帰っていない、とのことである。</p> <p>※ここで出てくる「陣の祝い」とか「陣のこと」というのが大津城攻防戦のことなのか、関ヶ原の戦いのことを指しているのかよくわからない。ただし、関ヶ原の戦いのことを指しているとすれば、公家の飛鳥井雅庸、西洞院時慶が共に心配している点は興味深い。</p>	
	<p>尾州^(マ)（美濃国関ヶ原カ）にて家康方と上方衆との合戦が度々あり、上方衆が優勢であったが、「手前」（自分の目の前）に至り、小早川秀秋が裏切り、うしろから1万5000余にて切りかかったので、どうにもならず（上方衆は）敗北した。大谷吉継・石田三成以下、過半（大部分）は討死した。（そして）即時に家康の衆は入京した。この小早川秀秋は幼少より太閤秀吉の御養子として出頭（特別の寵愛を受けていること）の人であり、今回のなりゆき（裏切ったこと）は、武勇のうえとはいえ、（あるいは）旧孝（のため）とはいえ、卑怯なおこないとして世間から嘲笑された。</p> <p>※小早川秀秋の裏切りは、関ヶ原の戦い直後より、世間から嘲笑されたことがわかる。</p> <p>※石田三成が討死した、としているが、これは誤報である。</p>	中臣祐1-80頁
9月16日	<p>義演が法安寺から大坂城へ向い、(大坂城で)大般若転読をおこなった。(その後)午の刻(真昼の12時頃)に宿坊へ帰り、早々に荷物を調べて、森口まで出た。</p>	義演准2-217頁
	<p>山科言経が鳥飼道晰のところへ行き、しばらく雑談をした。昨日であろうか、美濃国・近江国東^(マ)（美濃国関ヶ原カ）において合戦（関ヶ原の戦い）があった、ということである。(そのことについて)取沙汰した。</p>	言経卿10-218頁
	<p>大坂方、東福寺へ甲乙軍勢の乱入するを禁じる（東福寺文書）</p>	東福寺-795頁
9月17日	<p>毛利輝元より（北野天満宮へ）人が来た（北野天満宮）。</p>	北野社5-291頁
	<p>木下家定が大坂へ人質に^(マ)（をカ）呼びに下った、とのことである。</p>	北野社5-291頁
	<p>北政所も禁中へ出る。 ※頭注では「豊臣秀吉室おね難を禁中に避く」とある。</p>	北野社5-291頁
	<p>世上がなんとなく騒々しいので、大覚寺殿、八条殿が（後陽成天皇を）お見舞いになる。城（京都新城）へ火をかけるだろう、と言って、北政所がまずまず（御所へ）逃げてきて、准后（勤修寺晴子）のところにいる。</p>	お湯殿9-173頁
	<p>義演が（大坂の）森口より寅の刻（午前4時頃）に出て橋本辺りにて、美濃方面^(マ)（美濃国関ヶ原カ）で破軍（戦いで敗北したこと）の旨のおおよその風聞があった。淀のあたりまで迎えが来た。（そして）京方（豊臣公儀方）がすべて破軍の旨を確かに述べた。それより道を急いで未の刻（午後2時頃）に寺に帰った。その落徒（落人）が多く通ったが、哀しい様子であった。申の刻（午後4時頃）瀬田橋を伐り落とした、ということである。大津城を守っていた毛利元康が引き取った（退却した）旨を告げ送ってきた。（この知らせに）仰天した。</p> <p>※9月17日の早朝の時点で、関ヶ原の戦いの敗北の風聞が大坂に来ていたことになる。</p>	義演准2-217頁

	<p>※義演が勝利ではなく、敗北と認識している点に注意すること。つまり、当然かもしれないが、義演は豊臣公儀の立場から関ヶ原の戦いを見ていたことになる。</p>	
	<p>近江国佐和山（城）が落（城）した。後日にこのことを聞いた。禁中あたりの「大閤屋形」（京都新城）に北政所は常に住んでいたが、兄弟の木下家定が大坂から人数を率いて迎えに来た。それから晩に北政所は陽光院（陽光太上天皇）妃の御所に逃げた（移った）。（北政所は）言語道断の様子で、裸足で歩く様子であった。（このように）禁中のあたりは、ことのほか騒動は普通ではなかった。 ※北政所が関ヶ原の戦いの2日後に裸足で京都新城から陽光院（陽光太上天皇）妃の御所になぜ逃げこんだのか、その理由を考察する必要がある。</p>	言経卿10-218頁
	<p>昨夜、木下家定の家中で物騒（ざわざわとして落ち着かないこと）があった。 ※これは北政所の御所への逃げ込み事件と関係するか？</p>	時慶記2-107頁
	<p>小早川秀秋の「手返」（手のひらを返すようなおこない）により「天下騒動」があった。去る（9月）14日、赤坂（関ヶ原カ）方面にて合戦があり、大谷吉継が討死した。「手返ノ衆」は4人（だった）と聞いた。小西行長・脇坂安治・長東正家等と□□□にはわからない。今朝より巳の刻（午前10時頃）まで西園寺実益の（屋敷の）築地のあたりへ大坂より人数（軍勢）が（来て）甲冑を運び□□なく入りこんできた。（そのため）このあたりの門は戸を閉めて用心した。 ※関ヶ原の戦いは9月15日なので、（9月）14日とするのは誤りである。 ※小早川秀秋の裏切りに注目しており、それが「天下騒動」になった、としている。</p>	時慶記2-107～108頁
9月18日	<p>北政所が豊国社へ太刀・装束を奉納。</p>	舜旧記1-242頁
	<p>早くも家康は草津まで御上洛（の途中）にある。「天下初」（家康の天下初め、ということか？）になる、とのことである。（関ヶ原の戦いで）石田三成、大谷吉継そのほか各大名衆は討死した。毛利輝元と家康とは同心（和睦するという意味か？）とのことである。夜、伏見で放火がある。 ※石田三成が討死した、としているが、これは誤報である。</p>	北野社5-291頁
	<p>家康の「前午（手カ）」（先手という意味か？）が天津へ来て、福島（正則）が（天津城を）受け取った。（家康の）「前午（手カ）衆」（先手衆という意味か？）が伏見の森（毛利という意味か？）の家を焼く。夜更けに寺町において騒動があった。</p>	孝亮宿-730頁
	<p>毛利秀元が退却し、2万ばかりであろうか、（その軍勢が）当郷（醍醐）を通過していった。（そして）「コト引山」に陣取り、兵糧をして（兵糧を食べたという意味か？）、子の刻（真夜中の12時頃）に出立した、ということである。（こうした世情は）物騒であり、迷惑している。諸師以外はくたびれて散々の状況である。吉川広家（「吉川兩人（吉川蔵人カ）」は「唐口」（意味不詳）において降参した、ということである。（このことは）卑怯、卑怯（である）。 ※義演が吉川広家のことを卑怯、卑怯と痛烈に非難している点は注目される。上記の毛利元康（本稿の9月17日の項を参照）、毛利秀元については「引取」（退却）と記して「降参」と記さず、吉川広家のみ「降参」と記している点にその理由があるのか？つまり、</p>	義演准2-217頁

	吉川広家は家康と和睦したのではなく、広家は単独で（独断で）家康に降参したということになり、それが卑怯ということなのか？上記の「唐口」については、なんらかの誤記である可能性が高い。	
	家康が近江国まで上ってきた、ということである。伏見の毛利（屋敷）以下が少々放火された。	言経卿10-220頁
	昨夜、北政所が座を移された、とのことである。准后（勧修寺晴子）の御方にいるという風説（があり）これを尋ねるつもりである。木下家定の私宅あたりに木下勝俊が籠っている、とのことなので、人数寄せの風説があり、用心している。昨夜、おのおのが心配したが、（夜が）明けて聞くと静かである。木下勝俊は若狭へ逃れた、とのことである。道に落人が多い。或いは、関東衆が来ている、とのことである。道に人が多きようである。伏見が焼けた。家康が（やがて）上洛して「惣和与」（和与は和睦、和解という意味）になる、とのことである。夜中に驚くことがあった（この文は塗抹されている）。城中（伏見城か？或いは、京都新城か？）に（人を）殺す衆がいるので、（西洞院時慶は）火の用心のことを申し付けた（この文は塗抹されている）。 ※家康が（やがて）上洛して「惣和与」（和与は和睦、和解という意味）になる、という記載は注目される。逆に言えば、この時点（9月18日）でまだ和睦していなかった、ということになる。ということは、吉川広家が9月14日に家康と和睦した、という通説の見解が間違っていることがわかる。	時慶記2-108～109頁
9月19日	梵舜が大津へ行く。（家康の）先勢は山科郷に至り、すべて陣取りをしている。	舜旧記1-243頁
	北野天満宮の祠官・松梅院が養命坊と同道して家康を迎えに出かけたが、日ノ岡に関所がすえられていたので各自が帰った。家康は今日は草津に逗留とのことである。	北野社5-292頁
	制札を取りに金蓮院演照を遣わした。未の刻（午後2時頃）、諸軍勢が山科郷に陣取り、小野まで人数（軍勢）がいたが、随心院での濫妨は言語道断の次第であった。福島正則・池田輝政の両人の制札をまず取って、北の口を初め方々にこれを打った。守備には福島正則の衆を入れて、まず異儀なく安堵している。山科・小野の小屋が落ちて濫妨を少々した（場合は）人を殺した。およそ建武（の新政）・応仁（の乱）の大兵乱もこれには及ぶはずがないのではないか。大事（とは）この時である。家康の制札が酉の刻（午後6時頃）に到来して安堵している。 ※義演が今回の戦乱について、建武（の新政）（=南北朝の内乱）・応仁（の乱）の大兵乱と比較して、それ以上と述べている点は興味深い。	義演准2-217～218頁
	世上騒動のことがあるので、山科言経が禁中の加番（を勤めるため）に来た。	言経卿10-220頁
	（西洞院時慶は）日中は普請のことを申し付けた。小早川秀秋が北政所を見舞いに准后（勧修寺晴子）の御方へ来た。（西洞院時慶は）火の用心のことを申し付けた。（これは）城中（伏見城か？或いは、京都新城か？）□（にカ）人があるので、そのための気遣いである。	時慶記2-108～109頁
9月20日	家康が大津城に入る。	舜旧記1-243頁

	今日、家康を御迎えに公家衆がそれぞれ行く。今日、家康は大津へ着く。北野天満宮の祠官・松梅院が当坊の養命坊と同道して家康のところへ行ったが御礼ができずに帰る。	北野社 5 - 292 頁
	小西行長は縛られて大津にいる。	北野社 5 - 292 頁
	家康は、奥平殿 (奥平信昌) を (京都) 所司代にすえる。 ※ 9 月 20 日の時点で、京都所司代が前田玄以から奥平信昌に変わったことがわかる。	北野社 5 - 292 頁
	伏見で放火がある。	北野社 5 - 293 頁
	家康が大津まで上ってきたので、(後陽成天皇は) 勸修寺右大弁の宰相 (勸修寺光豊) を御使いに遣わされた。	お湯殿 9 - 173 頁
	伏見で大名の屋敷が焼失した。終夜、焼けた。(これは) 大坂 (豊臣公儀) への覚え (この場合の意味は要検討。牽制という意味か?) であろうか。家康が大津の城へ入った、ということである。	義演准 2 - 218 頁
	家康が大津城まで上ってきた、ということである。	言経卿 10 - 220 頁
	家康が大津に着いたとのことなので、(西洞院時慶は) 迎えに出た。(その時) 申し合わせた衆は、広橋兼勝・烏丸光宣・光広などである。	時慶記 2 - 109 頁
	大津城にてそのまま対 (以下の文字は破損・虫損等により読めない)。近衛信尹より使いがあったので (西洞院時慶が) 参上して (話を聞いたところ、近衛信尹は) 家康を迎えに草津まで (前日に?) 行ったが、家康が語ったところでは、前田玄以は大略、別儀がない、とのことであった。伏見で夥しく焼けた。 ※家康がこの時点 (9 月 19 日か?) で前田玄以を許している点は注目される。	
	明日、21 日に筒井定次が山城 (国) より当国 (大和国) へ入る、とのことである。これは当 (国) 守護を家康より命じられた、とのことである。 ※関ヶ原の戦いのあと、大和国が筒井定次の領国になったことは、一般に通説では指摘されていないので、この記載は注目される。	中臣祐 1 - 80 頁
9 月 21 日	梵舜が家康への礼のため (大津へ) 行く。その際、吉田兼見よりの太刀・折紙を持参した。	舜旧記 1 - 243 頁
	北政所は内裏へ逃げたが、明日、(京都新城の) 御本丸へ帰る。 ※北野社 - 5、293 頁の頭注の「秀吉室おね禁裏より大坂城へ帰る」(下線引用者) という記載は誤りと思われ、京都新城へ帰った、とすべきであろう。	北野社 5 - 293 頁
	北野惣中での落人改めを小島に申し付ける。	北野社 5 - 293 頁
	陣替えがあり、急に逗留があった。大坂 (城) の毛利輝元の和睦 (「アツカ (「ヒ」脱カ)」) について風聞がある。 ※このことは、この時点 (9 月 21 日) でも毛利輝元と家康は和睦していなかったことを示している。よって、吉川広家が 9 月 14 日に家康と和睦した、という通説の見解が間違いであることがわかる。	義演准 2 - 218 頁
	前田玄以は異儀がない、とのことなので、珍重であると (西洞院時慶は) 申し遣わした。	時慶記 2 - 109 頁
9 月 22 日	今朝、北野天満宮の祠官・松梅院が吉田浄慶等と共に、大津にいる家康を見舞いに行く。(家康は) 一段と御機嫌にて (それから) 帰る。	北野社 5 - 293 頁

	落人改めのために出ている山口勘兵衛・能勢宗左を見舞いに、北野天満宮の祠官・松梅院が鞍馬へ行く。	北野社5-293頁
	鞍馬にて落人10人ばかりをとらえる。	北野社5-293頁
	陣替えによって濫妨（人）200～300人が御陵口へ来たので防いだ。炭山にて濫妨（をしたので）終日戦った、ということである。当郷（醍醐）において警固人として濫妨人の首を晒した。山上・山下に雑説があり、物騒である。	義演准2-218頁
	この頃（最近）、小西行長、石田三成等を生け捕った、ということである。	言経卿10-222頁
	今日の明け方に御城（京都新城）へ北政所が帰った。鞍馬に落人がいる、とのことで人が多く行った。	時慶記2-110頁
	今日、筒井定次が（大和国へ）入国とのことで知らせがあったが、また延引した、とのことである。	中臣祐1-81頁
9月22日カ	筒井定次が（大和国へ入国のため）笠置（山城国相楽郡）に着陣した。惣国（大和国）のことと、天下の様子は定まっていない。	中臣祐1-81頁
9月23日	落人改めのことについて御奉行衆から書状が来る。（その内容は）北野社中を改めるように神事奉行より申し来る。	北野社5-294頁
	大坂では扱（和睦）になった、ということを書いて来た。（これは）家康と毛利輝元のことである。 ※この時点（9月23日）ではじめて、家康と毛利輝元が正式に和睦した、という記載が出てきたことになる。よって、吉川広家が9月14日に家康と和睦した、という通説の見解が間違いであることがわかる。	北野社5-294頁
	内大臣徳川家康の上洛により、勅使として参議の勤修寺光豊を大津に遣わした。	後陽成1-282頁
	右大弁の宰相（勤修寺光豊）が（家康のいる）大津へ行った。	お湯殿9-173頁
	白昼、（京都の）六條において安国寺恵瓊を搦め取り、（家康がいる）大津に引き渡した。	孝亮宿-730頁
	雑説があるので、松平忠吉が警固を申し請けて、おのおのが安堵した。	義演准2-218頁
	安国寺恵瓊が寺内にて生け捕られた。興門内の端坊において生け捕られた。	言経卿10-223頁
	安国寺恵瓊を召し取った、とのことで、七条端坊にも出入りがあった、とのことで気遣いをした。石田三成も召し捕らえた、とのことである。	時慶記2-110頁
9月24日	今日、北野境内中の家並に誓紙を申し付け、落人がいない旨（の誓紙を）を（出すように）申し付けた。	北野社5-294頁
	極藹清（清極藹の誤記カ）少納言と予（小槻〔壬生〕孝亮）は同道して大津へ向かい、家康へ御礼を申し上げた。越前国において石田三成を搦め取り、（家康がいる）大津城のあたりに置いた、と今日聞いた。また、小西行長、安国寺恵瓊、（石田三成の）両三人について本人共を搦め取った、ということである。	孝亮宿-731頁
	義演が家康への礼のため大津城へ行く。山科七郷は目の及ぶところすべて陣取りをしているので、不便である。徳川秀忠が伏見へ来た、ということである。	義演准2-219頁

	大坂のこと(「大坂ノ義」は無事調った、とのことである。家康はいまだ大津に在陣している。 ※大坂のことは無事調った、というのは和睦が成立した、という意味であろう。	時慶記2-111頁
9月25日	毛利輝元が大坂城から退いて(大坂の)木津(の毛利家屋敷)に向った、ということである。	言経卿10-223頁
9月26日	今日、家康が淀まで来た。 家康が(大津から)陣替えをした。北国の前田利長も(家康に)共奉(供奉カ)している、ということである。(前田利長の軍勢は)4万騎ということである。小西行長・石田三成・安国寺恵瓊の3人が生け捕られて通った。浅ましい次第である。毛利輝元は(大坂の)下屋敷へ(大坂城から)出た、ということである。増田長盛は高野山へ行った、ということである。大坂(城)本丸は秀頼様の御人数が警固している、ということである。ただし、治定についてはいまだ聞かず、洛外ではすべて濫妨(がある)、ということである。数万騎が打ち入っているので(世情が)取り乱している。この度の大乱は昔にも聞かない。※この度の大乱は昔にも聞かない、という義演の感想は興味深い。※この記載からは、石田・毛利連合政権の解体(崩壊)の様子、大坂城本丸での秀頼の様子、家康の上方への進出の様子がよくわかる。	北野社5-295頁 義演准2-219頁
	家康が淀城に来た、ということである。	言経卿10-223頁
	山崎は徳川秀忠の陣所である。	時慶記2-111頁
9月27日	この度、家康の敵となった者を預かり置く人がいるかどうか、という吟味があったので、ない旨を申し遣わした。 家康の奉行衆から預り物のことについて、礼明として折紙が来た。 家康が大坂(城)へ来た、ということである。秀頼は(家康と)和睦した、ということである。 ※9月27日に秀頼が家康と和睦した、としている点は重要である(9月27日は家康が大坂城に入城した日である)。秀頼が家康と和睦したということは、 <u>家康が敵対してしたのは秀頼(つまり豊臣公儀)であったことになる</u> 。そして、吉川広家による9月14日の和睦の話が広家の捏造であることがわかったので(拙稿「関ヶ原の戦いにおける吉川広家による「御和平」成立捏造のロジック」、『愛城研報告』19号、愛知中世城郭研究会、2015年)、本当の和睦はこの時点(9月27日)で家康と秀頼の間でおこなわれたことになる。冷静に考えれば、和睦というのは両軍のトップ同士が締結するものであって、毛利家の家臣にすぎない吉川広家クラスに締結できるような性格のものではないことはすぐにわかるはずである。	孝亮宿-731頁 義演准2-219頁 言経卿10-224頁
	家康は敵方の預り物が無い旨の書状を出すように求めてきたので、その書状を遣わした。	時慶記2-112頁
9月28日	家康は昨日、大坂に向った、ということである。 家康は大坂城へ入った、ということである。毛利輝元は本国へ帰った、ということである。治定についてはいまだ聞かない。前田玄には河内(国)の天野山(金剛寺)にいる、ということである。 山科言経父子が明日大坂へ下向するため禁中に暇を申し入れた。	孝亮宿-731頁 義演准2-220頁 言経卿10-224頁
9月29日	安国寺恵瓊・石田三成・小西行長等が大坂・堺等で引き回された。	言経卿10-225頁

	近衛信尹が大坂へ下向し、西洞院時慶からの言伝てにより平野（神社）の御祓（の御札）を家康へ献上した。	時慶記2-113頁
9月30日	長束正家が近江日野において自害した。 ※通説では長束正家が死去した日は10月3日である（『国史大辞典』10巻、吉川弘文館、1989年、708頁）。後述のように、長束正家の自害については10月1日説（時慶記2-114頁）もある。	舜旧記1-244頁
9月	是月、是より先、小野木某等が細川幽齋を丹後国田辺城に囲んだ。よって、後陽成天皇が古今伝授の泯滅を軫念あらせられ、是月、勅使を遣わして兵を解かしめられた。	後陽成1-282頁
9月？日	安国寺恵瓊・石田三成・小西行長が生け捕られて拘禁された。（そして）大坂中を引き回された、とのことである。（関ヶ原の戦いで）大谷吉継は切腹したが、比類のない働きであった。（大谷吉継は）嶋左近父子と3人で同所（関ヶ原）にて討死したが名誉であった。 ※9月15日条（中臣祐-1、80頁）で、小早川秀秋の裏切りを卑怯と記しているのに対して、大谷吉継、嶋左近父子の討死を名誉なことと記していることは対照的である。	中臣祐1-82～ 83頁
10月1日	この度の謀反衆3人である石田三成・安国寺恵瓊・小西行長が洛中の大路を越えて、六条河原において首を刎ねられ、三条橋へ梟首にされた。次いで、長束正家も梟首にされた。	舜旧記1-244頁
	今日、石田三成・小西行長・安国寺恵瓊の両三人が、この度、家康に対して御無沙汰（無礼）をしたので車にて引き回され、六条河原において成敗された。	北野社5-297頁
	この度、家康の敵になった者である石田三成・安国寺恵瓊・小西行長の3人を搦め取り、上下京町において引き回された。予（小槻〔壬生〕孝亮）は（それを）見物に向かった。後に、六条河原において首を放った、ということである。	孝亮宿-731頁
	（以下のことを）伝え聞いた。石田三成・小西行長・安国寺恵瓊の3人が、洛中を引き回されて六条河原において首を切られた。（そして）三條橋において梟首にされた。	義演准2-220頁
	安国寺恵瓊・石田三成・小西行長等が洛中を引き回された。六条河原において自害し、首は三條橋あたりにて掛けられた。（これは）言語道断のことである。（そのために）貴賤が群集した。（安国寺恵瓊・石田三成・小西行長は）昨日（京都へ）上った。	言経卿10-225頁
	この度の謀反衆である石田三成・安国寺恵瓊・小西行長は引き回されて、六条川原において切られ、首は三條橋の□南に掛けられた。（その）見物（人）は数万人であった。西洞院時慶は、二条の舞人の上野介のところにて見物した。	時慶記2-113頁
	石田三成・安国寺恵瓊・小西行長などの首が、三條橋下において梟首にされた、ということである。	孝亮宿-731頁
山科言経父子が本願寺光昭と共に大坂へ（下るために）発足し、淀から乗舟した。	言経卿10-226頁	
長束正家・同直吉が昨日自害した。 ※この記載が正しいとすれば、長束正家の自害は10月1日ということになる。	時慶記2-114頁	

10月3日	長束正家が近江において切腹し、その首は三條橋前において梟首にされた、という風聞である。	孝亮宿 - 731頁
	長束正家が ^(生害カ) 生殺した旨の風聞がある。	義演准2 - 221頁
	山科言経父子が家康のところへ行き、対面して知行所のことを聞いた。(それによれば) 近江国へ人を遣わす予定とのことである。	言経卿10 - 226頁
	昨日、梅津・太泰寺あたりで、また、関白□□家中が落人をとらえ置いたとして取り巻いた騒動があった、とのことである。(中略) 公儀より指出を命じられ、押さえられた、とのことである(このことが落人のことに関係するかどうかは不明)。 ※ここで「公儀」と表記されている点に注意すること。	時慶記2 - 114頁
10月5日	梵舜が丹波亀山城の細川幽斎を見舞いに行く。	舜日記1 - 245頁
10月6日	小早川秀秋について雑説がある。 ※この記載における「雑説」が具体的に何を指すのかは不明である。	時慶記2 - 115頁
10月8日	石子備前(石川頼明カ)の首が三条橋にさらされた、ということである。義演が前田玄以への見舞いとして、河内(国)の天野(山金剛寺)に使者を遣わす。	義演准2 - 221頁
10月10日	毛利輝元は降参について異儀がない、ということである。治定はどのようなようになるであろうか。 ※毛利輝元について「降参」としている点に注意すること。	義演准2 - 222頁
10月14日	(前文省略) この度の一乱(後文省略)	義演准2 - 222頁
	山科言経父子が本願寺光昭と共に早朝に大坂を発足し、七つ時分(午後4時頃)に上洛した。	言経卿10 - 228頁
10月15日	諸大名の知行分けがあった、ということである。福島正則は備後・安芸両国(を拝領し)、毛利輝元の城(である)広島城を拝領した、ということである。前月(9月)の今日(15日)は美濃(での)合戦の日であった。(こうしたことは)夢のようである。	義演准2 - 222頁
10月16日	大坂へ前田玄以を見舞うために、西洞院時慶は板屋左近丞を遣わした。	時慶記2 - 119頁
10月17日	今日、北野天満宮の祠官・松梅院が大坂より上洛した。去る(10月)7日、前田玄以が天野山金剛寺(河内国)に牢人として入っているのを、北野天満宮の祠官・松梅院が見舞った。	北野社5 - 297頁
	前田玄以が去る(10月)15日に大坂へ上り、家康の御前が済んだ。 ※10月15日に前田玄以が家康から正式に許されたことがわかる。	北野社5 - 298頁
	(前田玄以を見舞うために西洞院時慶が大坂へ遣わした)板屋左近丞が大坂から上洛し、前田玄以の返事があった。(それによると)去る(10月)16日に(家康への)御礼は済んだ。脇坂安治から(西洞院時慶への)返事があった。 ※この記載によれば、10月16日に前田玄以が家康から正式に許された、という説もあることになる。	時慶記2 - 120頁
10月20日	前田玄以が天野(山金剛寺)から大坂へ出た、ということである。	義演准2 - 223頁
10月21日	当所(醍醐)の番匠(大工)に伏見城から(徴用の)触(が来た)、ということである。 ※伏見城の復興のための大工徴用であると考えられる。	義演准2 - 223頁
10月23日	(前文省略) 一乱以後(後文省略)	義演准2 - 224頁

10月24日	笠取庄にて材木200本を伐る。 ※伏見城の復興と関係するか？	義演准2 - 224頁
11月2日	(以下のことを)伝え聞いた。安芸の毛利輝元は広島城へ帰った旨、大坂あたりでは風聞がある、ということである。朽木元綱は本領に異儀がない、ということである。	義演准2 - 225頁
11月3日	(以下のことを) 伝え聞いた。家康は近日（中に）参内する、ということである。もっとも、珍重である。	義演准2 - 226頁
11月4日	梵舜が家康見舞いのため、早朝より大坂へ下る。	舜日記1 - 248頁
11月9日	徳川秀忠が近日（中）に参内する、ということである。（秀忠は）関東へ下向する、ということである。結城秀康は越前（国）を拝領する、ということである。松平忠吉は尾張国（を拝領する）、ということである。（松平忠吉は）大坂・伏見に家康の（代理の）留守（将）としている予定である、ということである。	義演准2 - 228頁
11月11日	この度、家康が（上杉討伐のために）東国へ下向したあと、各々が謀反をして、尾州（尾張）・濃州（美濃）にて数度合戦に及び、上方衆が敗北した。（そして）家康が天下を補佐することになった。（大和国を拝領していた）増田長盛は高野（山）へ登山することになった。※関ヶ原の戦い後の慶長5年11月の時点で、家康が天下を取ったのではなく、天下を補佐することになった、としている点は注目される。つまり、この時点（慶長5年11月）で天下人は依然として豊臣秀頼（秀吉の後継者）であり、家康はその補佐にすぎない、という認識を同時代人が持っていたことになる。	中臣祐1 - 87頁
11月12日	大坂へ下るため、山科言経が冷泉為満と共に早朝に発足して、鳥羽から乗船した。暮れには天満（摂津）へ着いた。	言経卿10 - 247頁
11月13日	己の刻（午前10時頃）に、山科言経が冷泉為満と共に、大坂城西の丸（にいる）家康のところへ行った。（そして）種々の雑談をした。申の下刻（午後5時頃）に帰宅した。 ※11月13日の時点で、家康が大坂城西の丸にいる点に注意すること。大坂城の本丸には秀頼がいるため、家康が大坂城の西の丸にいる、ということなのであろう。つまり、家康の大坂城での居場所（常駐場所）は西の丸であったことがわかる。	言経卿10 - 248頁
	西洞院時慶が大坂へ下向した。	時慶記2 - 129頁
11月14日	山科言経が冷泉為満と共に（大坂城の）家康のところへ行き、雑談をした。次に幸若舞を見た。戌の下刻（午後9時頃）に帰宅した。	言経卿10 - 248頁
	西洞院時慶が（大坂で）前田玄以と対面した。	時慶記2 - 129頁
11月16日	今日、徳川秀忠が上洛し、各大名衆も（京都へ）上った。	北野社5 - 301頁
	徳川秀忠が大坂から上洛した。近々参内する、ということである。山科言経が冷泉為満と共に、大坂を発足し、申の下刻（午後5時頃）に帰宅した。	言経卿10 - 249頁
	義演が寺領の山役のことについて宰相（山田長運）を大坂へ説明のために遣わした。義演は前田玄以・片桐且元・小出秀政の両三人へ書状を遣わした。 ※この3人（前田玄以・片桐且元・小出秀政）はこの時点（慶長5年11月）における秀頼の出頭人（または取次）であった、ということか？	義演准2 - 229頁

11月17日	前田玄以が上洛したので書状を遣わした。徳川秀忠・松平忠吉が上洛した。	時慶記 2 - 130頁
11月18日	徳川秀忠が御所に参内した。	舜旧記 1 - 249頁
	今日、徳川秀忠が参内した。	北野社 5 - 302頁
	徳川秀忠・松平忠吉が参内した。	時慶記 2 - 131頁
	徳川秀忠・松平忠吉・前田玄以等が参内した。徳川秀忠は太刀・馬代として銀百枚を献上した。松平忠吉は今日、四位侍従になり、馬代として銀三十枚と太刀を献上した。前田玄以は綿□把等を献上した。	孝亮宿 - 731頁
	徳川秀忠・松平忠吉等が参内した。	言経卿 10 - 250頁
	徳川秀忠が参内し、大納言宣下を受けた、とのことである。	義演准 2 - 230頁
11月19日	徳川秀忠、松平忠吉が豊国社へ参詣した。	舜旧記 1 - 250頁
	今日、徳川秀忠が豊国明神へ参詣した。前田玄以が御振舞いをした。北野天満宮の祠官・松梅院が前田玄以のところへ見舞いに行き、樽二つを進上した。(前田玄以は)一段と御機嫌であった。徳川秀忠は伏見へ帰った。	北野社 5 - 302頁
	早朝に徳川秀忠が豊国社へ参詣した。	言経卿 10 - 251頁
	徳川秀忠が豊国社へ参詣した。前田玄以が御振舞いをした、ということである。	義演准 2 - 230頁
11月21日	北政所が豊国社へ参詣。	舜旧記 1 - 250頁
11月22日	北野天満宮の祠官・松梅院が前田玄以のところへ見舞いに行き、蜜柑一折を持参した。	北野社 5 - 302頁
12月24日	今夜、毛利輝元より毎月の祈念料 9 貫文が来る (北野天満宮)。	北野社 5 - 307頁

【凡例】

- 舜旧記 1 …『舜旧記』第 1 〈史料纂集〉(続群書類従完成会、1970年)。
- 北野社 5 …『北野社家日記』第 5 〈史料纂集〉(続群書類従完成会、1973年)。
- お湯殿 9 …『お湯殿の上の日記』9 〈続群書類従・補遺 3〉(続群書類従完成会、1995年)。
- 後陽成 1 …『後陽成天皇実録』第 1 卷 (藤井讓治・吉岡眞之監修・解説、ゆまに書房、2005年)の網文を現代語訳した。
- 孝亮宿 …「左大史孝亮記」(孝亮宿禰記)(『改定史籍集覧』第 25 冊、近藤活版所、1902年)。
- 義演准 2 …『義演准后日記』第 2 〈史料纂集〉(続群書類従完成会、1984年)。
- 言経卿 10 …『言経卿記』10 〈大日本古記録〉(東京大学史料編纂所編纂、岩波書店発行、1977年)。
- 時慶記 2 …『時慶記』第 2 卷 (時慶記研究会編、本願寺出版社発行、臨川書店総発売元、2005年)。
- 中臣祐 1 …『中臣祐範記』第 1 〈史料纂集〉(八木書店、2015年)。
- 東福寺 …『東福寺誌』(思文閣出版、1930年発行、1979年復刻)。
- 押小路 …「押小路氏四卷之日記」(『大阪編年史』3 卷、大阪市立中央図書館、1967年、92頁)。